

TAKAYAMA CASTLE

# 高山城跡発掘調査報告書 Ⅲ

1996

岐阜県高山市教育委員会

TAKAYAMA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION, GIFU PREF.

## 序

高山城跡は、高山の江戸時代前半を知る上で欠くことのできない貴重な遺構として県の史跡に指定されています。戦国時代には多賀山城、金森時代には御殿風の高山城が築かれていましたが、幕府直轄地時代には城郭は石垣も含めて破却されてしまいました。城郭破却後は庶民の憩いの場として利用されるようになり、近現代になっては城山公園として諸設備が設けられ、城山グラウンドで野球大会が行なわれたこともあります。

現在も市民に親しまれているこの城山公園は、高山城時代の城郭遺構が随所に遺っていることが今までの調査でわかっています。今回三之丸堀の修景工事に先立ち堀内部の発掘調査が行なわれ、多くの遺物が出土しました。金森時代の城郭建物とも推定される建築材が多く出土し、堀が埋まってゆく変遷を垣間見ることができ、また堀の深さが5 mもあることがわかり、予想外に規模の大きい堀だともわかりました。

今後、自然公園として、歴史公園として高山城跡が保存され、また市民の方々に親しまれてゆくことを願い、本書を作製致しました。報告書刊行にあたり、三之丸堀周辺地元町内会、作業に従事、協力をいただいた皆様に深く感謝を申し上げます。

平成 8 年 3 月

高山市長 土 野 守

# 例 言

1. 本書は、平成7年8月1日～11月末日に約600㎡の現地発掘調査をした「高山城三之丸堀跡」の発掘調査報告書である。高山城跡は昭和31年9月7日、岐阜県の史跡に指定され、所有者は国有地、高山市、民有地であり、高山市が全体を管理している。所在地は城山、神明町ほかで、面積は114,006.2㎡を測る。また、県史跡の南側に隣接する山陵も含めて埋蔵文化財包蔵地（G12T00598）として台帳に記載される。さらに、県指定史跡を含め、金竜ヶ岡一帯を合わせて「高山城跡及びその周辺の野鳥生息地」として高山市の天然記念物に指定されている。
2. 調査は、国土庁の「田園都市等地域個性形成事業」として平成7年度岐阜県地域個性形成事業費補助金を受けて実施した。
3. 三之丸堀を防火水利として活用し、また三之丸堀景観を活かして堀の周縁を修景整備する事業に先立ち、事前の発掘調査をしたものである。
4. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長／高山市長・土野 守  
副団長／高山市教育長・上西哲丈  
指 導／岐阜県教育委員会文化課、高山市文化財審議会会長・大野政雄  
事務局／高山市教育委員会事務局長・沖垣内堯

文化課長・中澤 功	文化財係長・田中 彰	職員・岩田 崇、尾崎啓介
調査担当者・田中 彰	調査補助・岩田 崇	
5. 本編の執筆は、第1章～第4章を田中彰が担当し、遺物の実測を岩田崇が担当した。屋根材の墨書判読は高山市郷土館学芸員谷島博之が担当し、角竹文庫等郷土館収蔵史料の高山城に関連する文献目録は、同館嘱託政井陽子が担当した。
6. 調査にあたって、三之丸堀周辺町内会の皆様、松本忠治氏、飛騨護国神社宮司伊藤克史氏、宮大工袈裟丸時男氏、多治見市文化財保護センター田口昭二氏に多大なるご協力をいただいた。
7. 方位は磁北とした。
8. 本報告書の編集にあたり、遺構の記録保存という目的から、位置図面、遺構図面を極力多く掲載し、図版も文中に挿入して読みやすい内容となるよう努力した。

# 目 次

序

例 言

第1章 発掘調査の経過 .....	1
第2章 遺 構 .....	3
第1節 はじめに .....	3
第2節 絵図に見る高山城の防御 .....	4
第3節 三之丸の堀 .....	8
第3章 遺 物 .....	21
第1節 堀から出土した遺物の概要 .....	21
第2節 墨書があるこけら板 .....	22
第3節 出土遺物木製品 .....	24
第4節 黒田甲斐守、戸田山城守 .....	28
第5節 陶磁器類 .....	29
第4章 総 括 .....	32
第1節 建物推定 .....	32
第2節 黄金神社の歴史 .....	32
第3節 三之丸の堀 .....	35
第4節 出土遺物 .....	35
第5節 遺存する石垣実測図 .....	35

# 第1章 発掘調査の経過

高山城は三町（商人町）との比高差約百メートルの平山城である。岐阜県の史跡に指定され、高山の江戸時代前半を知る上で、最も重要な遺構として注目されている。

三之丸堀修景工事に先立ち、平成7年8～11月に堀の発掘調査が行なわれ、その結果遺物は16世紀末から19世紀の陶磁器、木製品では多くの下駄や、塗椀、桶、シャクシ、板絵などが堀の上層部に出土した。下層になると、全く遺物を含まなくなり、木の葉や、獣骨が数点確認された程度である。

ところが、東西・南北とL字型になっている堀の、南端からはおびただしい量の建築廃材が出土した。2～3ミリの薄いこけら葺屋根板材がほとんどで、他に構造材の一部も含まれていた。

注目すべきは、こけら板の中に9枚の墨書があったことで、その1枚に、「黒田甲斐守殿、戸田山城守殿」と江戸幕府重役の名前が片面に並べて記されていたことである。金森四代頼直の時代に親交があったことを示す記録ではないかと推定された。

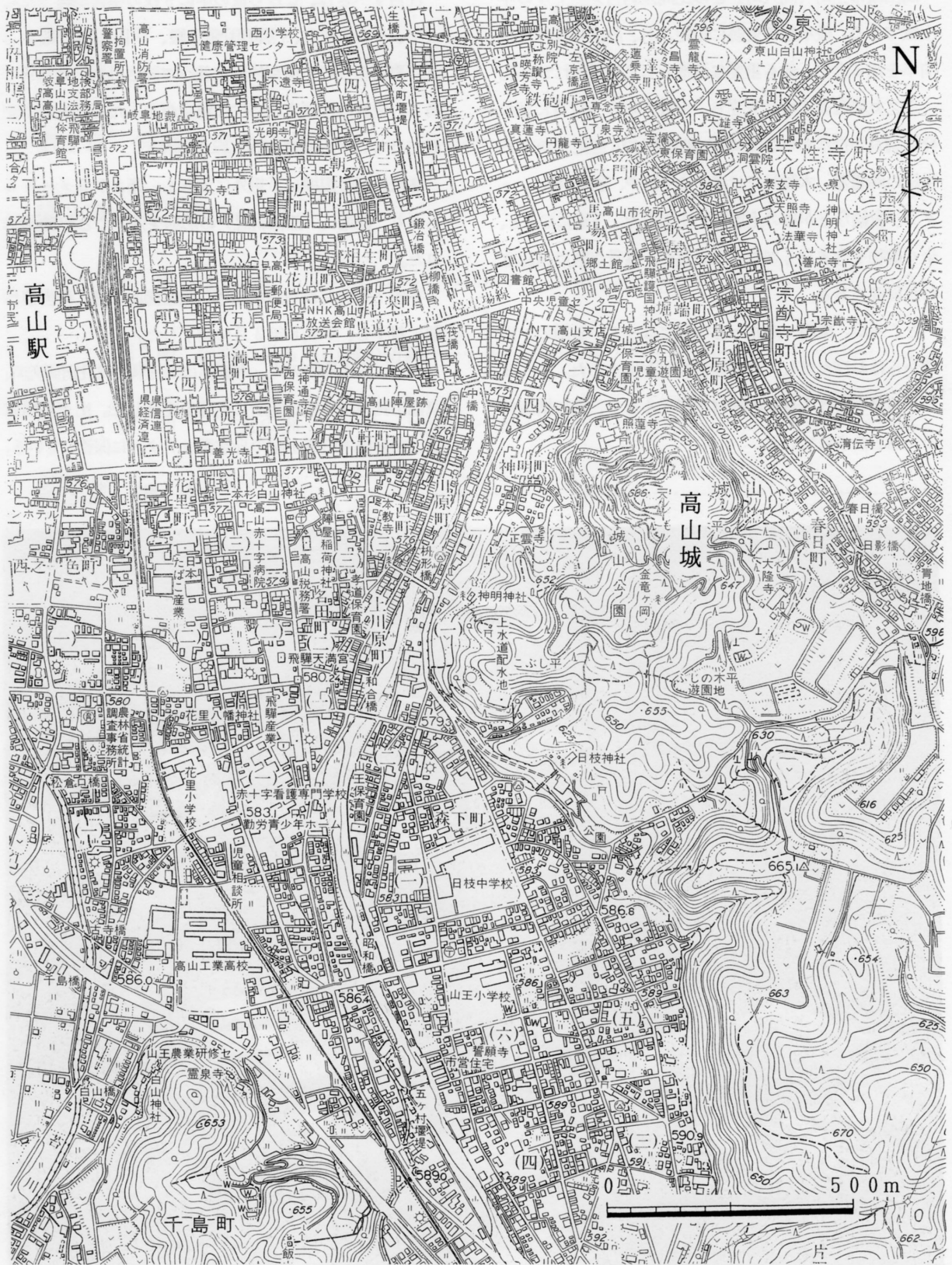
また、堀の規模は予想外に大きく、深さが5メートルもあり、箱堀（一部傾斜底）の形態を示すことが確認された。

平成7年12月から遺物整理、測量図面整理、報告書作製に着手し、平成8年3月に完了した。

また、出土遺物の内、木製品は（株）吉田生物研究所、京都市（株）吉田生物研究所に処理を委託した。出土遺物は高山市赤保木町風土記の丘学習センターに保管している。



PL1 三之丸堀周辺・模型ヘリコプターより



第1図 高山城位置図

## 第2章 遺 構

### 第1節 はじめに

過去における高山城の発掘調査には、昭和60、61年に本丸の発掘調査と本丸周辺の測量調査がある(註1、2)。

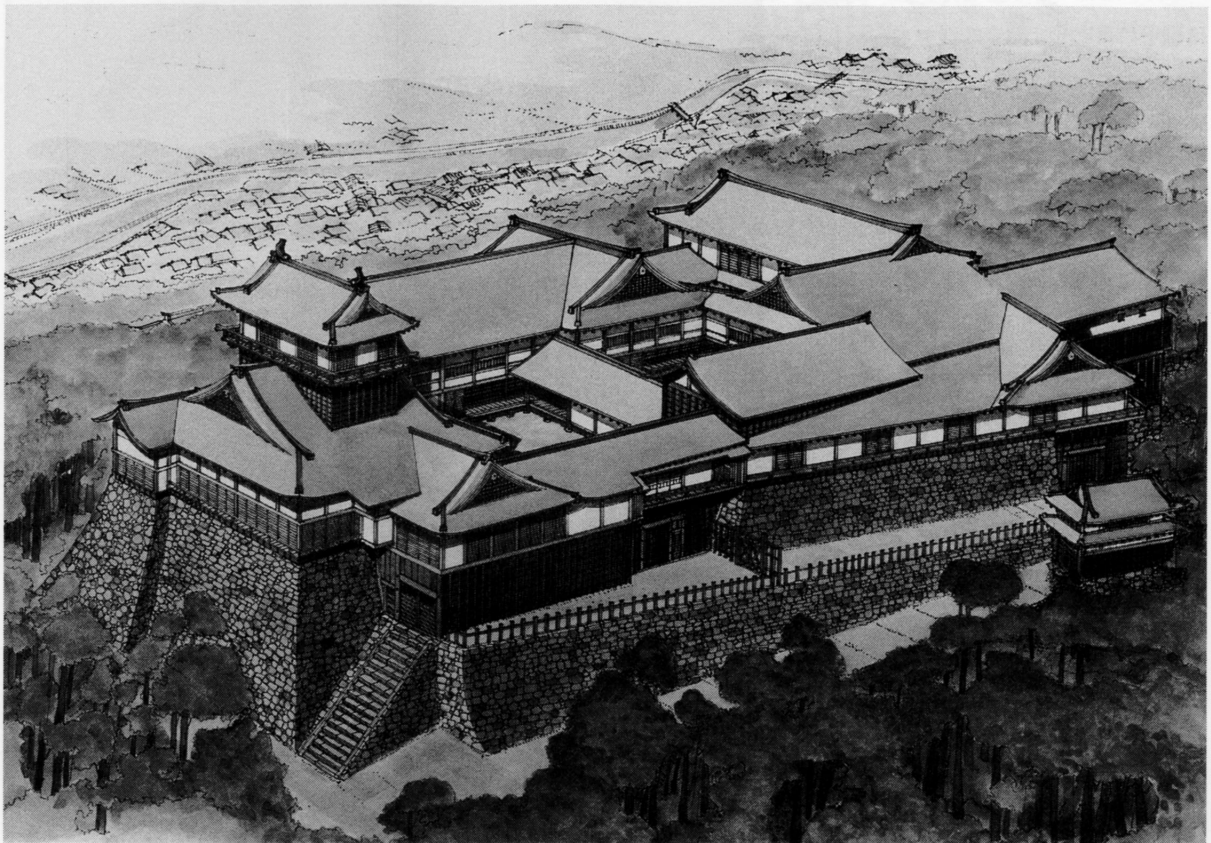
また名古屋工業大学(当時)内藤教授による本丸屋形の建築調査も行なわれ、昭和63年には高山城本丸屋形の復元模型が作成されている(註3)。内藤教授によると、高山城は「梯立式天守」であり、石塁等の構築技術の初期形態として、天然の地山地形に相応した不整形な本丸及び天守台を築き、あたかも、天守の階梯(階段、はしご)となるような低層の付櫓・御殿を添え加えている。他に安土城、大阪城(天正)、岡山城にその例がある。また、南が高く北が低い地形の高山城は甲州流兵学でいう五性のうち「赤龍地火性也」であり、高山城は火性梯郭式城郭だと認められた。

この模型は同年9~10月、食と緑の博覧会に展示された。高山城本丸屋形の復元模型は内藤教授の監修により京都で作成され、現在は高山市民文化会館ロビーに展示

してある。

このように、遺構調査は本丸部分という限られた部分を実施したに過ぎないが、そこから得られた城郭に関する情報は多大なものであった。戦後間もなくから昭和40年代まで、城山は動物園舎やペンギン池、城山ドライブウェイなどの工事で山容の一部が変えられているが、それでも城山は城郭の遺構を随所に残していることが判明してきた。

そんな中で、平成7年三之丸堀が修景整備されることになり、事前に堀の発掘調査が行なわれた。特筆すべきは堀の深さと堀南側から出土した建築廃材である。堀の深さは道路面から5メートル余と非常に深く、体裁だけの堀とは違うことがわかった。また、建築廃材は「こけら葺」のこけら板(屋根材)が中心で他に柱や梁材が少し含まれていた。中でも墨書のあるこけら板は、その書かれている人名に大きな関心が集まったのである。



PL 2 高山城本丸屋形

内藤博士考察

## 第2節 絵図に見る高山城の防御

金森時代の城下町絵図、城郭絵図は寛文〈第2図（註4）〉、延宝の石垣修理箇所絵図をはじめ、金森時代後期の城下町絵図が多く存在する（註5）。これらの絵図には三之丸下の堀が鍵型に記されており、他に人工的な堀は記されていない。宮川と江名子川をうまく外堀として利用し、三之丸に部分的な堀を造ったのだが、城の北側のみ堀を造っている点は、ある方向だけを守って満足している過渡的な段階であろうと一般的には考えられている。金森時代末期の高山城では本丸、二之丸、三之丸ごとに区分けする木柵が見られ（第3図）、三町との比高百メートルの自然地形の山をうまく防御の城としていて、堀にたよらない防御をしていたと考える。この高山城は城郭の分類からすると平山城となるが、山容と二段の平地を非常にうまく利用している。

防御上どのように地形を利用しているのか次に挙げてみる。

(1) 本丸が一番高所にあり、眺望、威圧感、四方からの音による情報が得られている。ちなみに、造成工事にあたっては削平のみとし、埋立を行わず石垣を積んでいる。

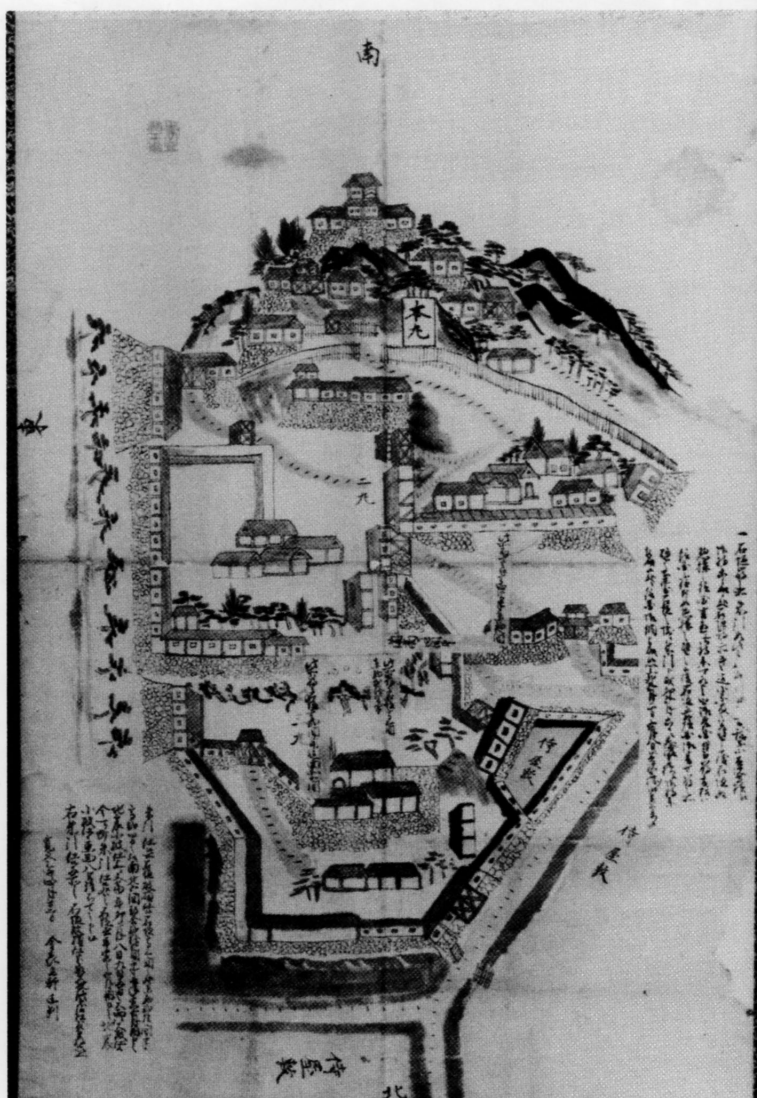
(2) 本丸から北へは東北曲輪、南へは帯曲輪と、一段低い曲輪をもたせ、防御上の虎口をもっている。

(3) この(1)と(2)は城郭の内で最も重要な部分で、本丸屋形は西を石垣で、東を長屋で囲う。東北曲輪と本丸下の大手方面、帯曲輪は堀と木柵、長屋、石垣で堅固に、さらに囲う。

(4) (1)~(3)の部分よりさらに下がったところには、南の大手に岡崎蔵（南之出丸）、北には中段屋形を設け、備えとしている。この中段屋形は「懸（かけ造り）」であり、山の崖に張出して、下部に長い足代を組んでいる様子が見え、こ

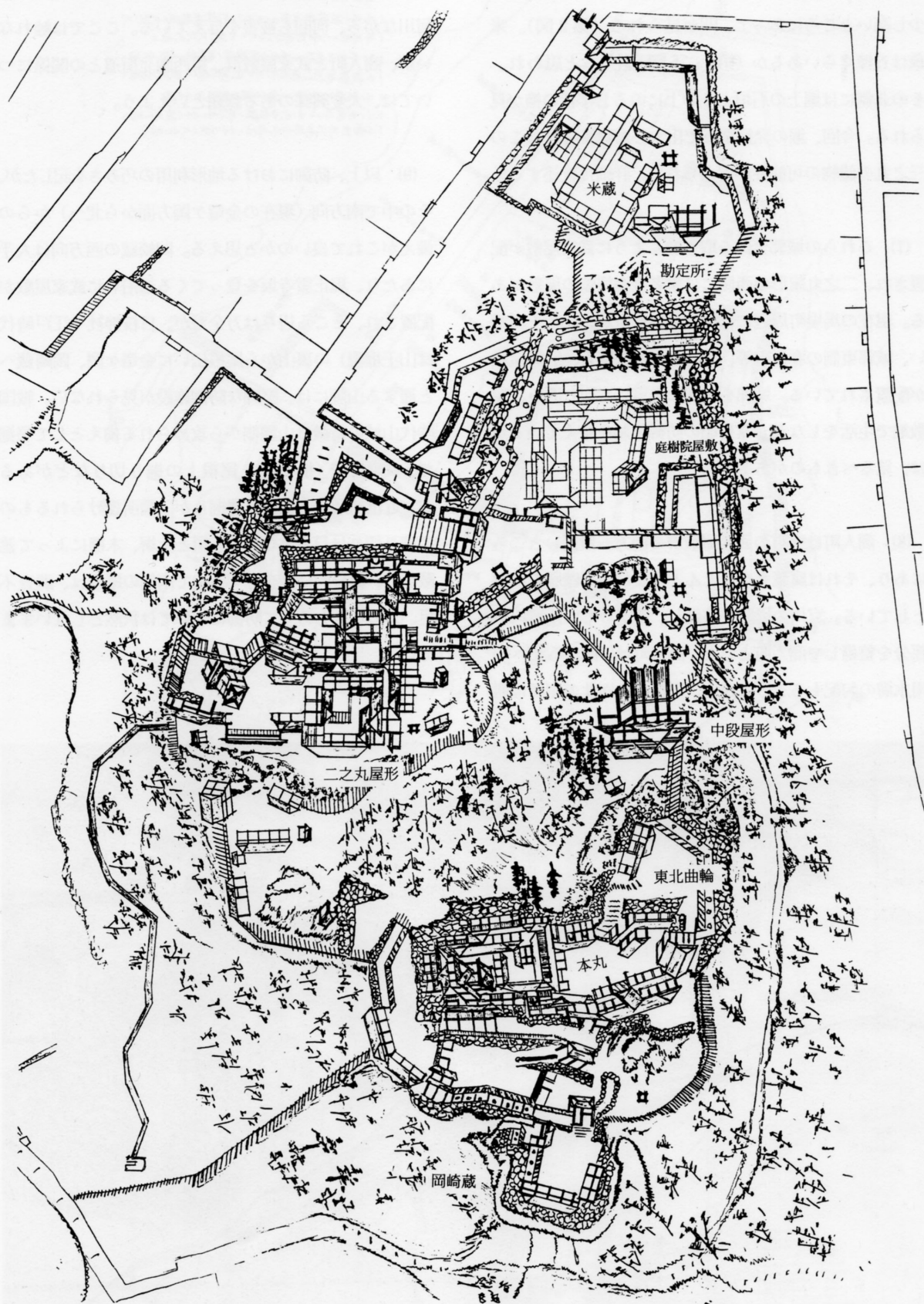
れは防御の備えと見るより風流上の意匠であると考えられる。この区域も、やはり木柵と土堀（鉄砲狭間も見られる）等で区画化されている。

(5) さらに下方の北側は二之丸で、広い敷地の屋敷が建てられる。この二之丸は、自然地形でこのような平坦地があったとは考えられず、庭樹院殿屋敷周辺は北に向かってのやせ屋根であったのを、切り盛りしていると思われる。二之丸屋形側もそうであろう。これらの建物については舞台や唐門、桜門、黒書院など建築面で復元可能な姿が絵図上に見られ、大いに注目される。この二之丸部分も、庭樹院殿屋敷と二之丸屋形では木戸、門によって分離され、非常に堅固な様相を見せる。



第2図 寛文3年 高山城絵図





第3図 高山城全体図（元禄時代）

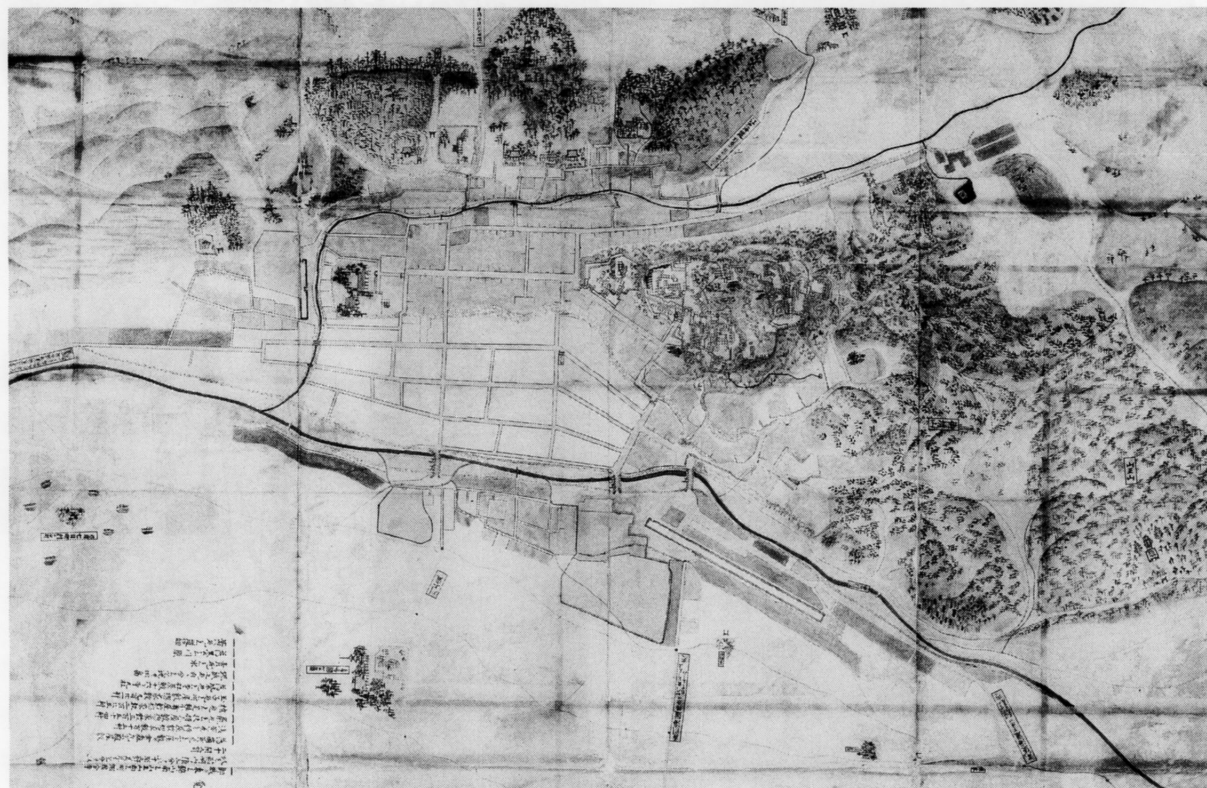
(6) 庭樹院殿屋敷の北方は、一段下がって三之丸があり、勘定所、米蔵が位置する。勘定所は三之丸の中でも少し高いところにあって、門が見られる(第2図)。米蔵は五棟ぐらいあるか(第4、5図・註6)と思われ、その北側には堀上の石垣とその上にあるL字状の櫓が見られる。今回、堀の発掘調査で出土した建築廃材はこの三之丸の建物の可能性が考えられた。詳細は後述する。

(7) これらの城郭全体を取り巻くように武家屋敷が配置され、二之丸屋形の西側には家老金森将監の屋敷がある。現在の馬場町周辺には位の高い家臣が、江名子川沿い、城郭東側の春日町等、外回りには扶持人、足軽屋敷が配置されている。城郭を環状に幾重にも取り囲み、屋敷地で生活をしながら常日頃の防御体制を整えている点は、見るべきものがある。

(8) 商人町は空町の武家屋敷群の西方一段低いところにあり、それは腐葉土をほとんど含まない砂礫層を地盤としている。宮川の堤防を整備し、安定していた河川敷部分を整備して商人町とした。商人町は、南から北への用水溝の勾配もちょうど良く、現代でも南北の側溝は通

りが良い。ちなみに、江戸時代に宮川が大きく氾濫したことはなく、部分的堤防決壊で済んでいるが、苔川は小河川ながら、何回も被害を与えている。ここでは触れないが、商人町と武家屋敷群、東西南北街道との関係については、大変興味のある課題といえよう。

(9) 以上、防御における地形利用の巧みさを記したが、その中で南方向(現在の金竜ヶ岡方面から北へ)からの備えがこれで良いのかと思える。岡崎蔵の西方向は大手にあたり、現正雲寺坂を登ってくる道沿いに武家屋敷が配置され、そこら辺りは万全だが、日枝神社(江戸時代は山王権現)の裏山から尾根伝いに金竜ヶ岡、岡崎蔵へと通ずる山陵には、堅固な防御施設が見られない。戦国時代山城の特徴は山麓側から攻められる備えとして堅掘り、武家屋敷(根小屋)、尾根上の掘り切りなどがあるが、近世初頭高山城には堅掘りが二箇所設けられるものの掘り切りは見られない。石垣と土塀、木柵によって遮蔽をし、部分的に堀を配する中で南側の尾根は、調査不足、力のなさもあって防御については釈然としないままである。



PL 3 城下町絵図

文献2より



### 第3節 三之丸の堀

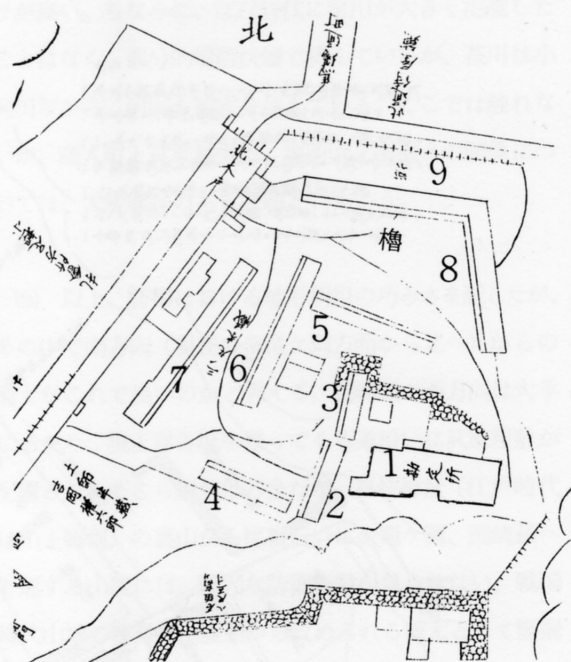
#### (1) 絵図から

絵図に表わされている堀の形態を見てみよう。

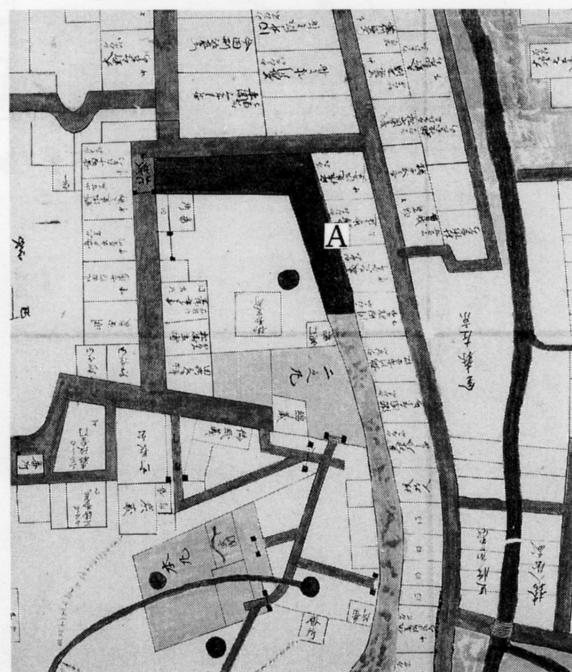
第5図(註6)は、金沢藩が作製した絵図で、一段高い所に1勘定所がある。ここは、現在黄金神社、匠神社があるところである。勘定所の西側には長屋形式の米蔵2～7が六棟?あると考えられる。この蔵のいずれかが高山陣屋に移築されているものであろう。勘定所の北方は一段低くなっており、現在梅村速水の碑や、相撲場、城山保育園が建っている。この平地の東、北端に石垣(第2図に見える)が積み、その上に8櫓が建っていた。この櫓の用途は米蔵なのか、倉庫なのかは判らないが、鉄砲狭間のある土塀が両端に取り付く。堀から出土した建物廃材は、この櫓なのかと一つの可能性を考えた。9の堀の形として気になるのは、櫓東部分の中程までしか堀の範囲が及んでいないところである。金沢藩のしっかりとした図化作業から考えると、堀の水域はこの形態であったと考える必要がある。L字型の堀の南北堀は、当初(金森時代初期)からの堀が、南側からかなり埋まっていたことになる。この絵図は六代頼吉の時代である。堀の発掘調査ではL字型の櫓の長さ部分まで発掘して8櫓南端下部も堀であることは確認している。建物廃材はここから出土した。

第6図は、住香草文庫所蔵の絵図だが、寛文・延宝の絵図(第2図(註4))同様、堀の南端が奥まで伸びている。鬼門櫓の下まで伸ばしているが、ラフに表わされて正確ではない。この中で注目したいのはA地点で、武家屋敷裏側と堀が接するところに道路が存在しない。

第7図は、元禄5～8年に金沢藩が作製した高山盆地全体絵図の三之丸部分拡大である(註2)。時代は第3～5図と同じで、やはりL字状の堀のうち、南北の堀が短く表わされている。現在の堀は、もっと長く、また発掘調査の結果でも、堀が南北に長かったことを裏付けている。ただ、第5、7図で表わしている堀の範囲は、水が溜まっている部分を表わしているのであって、堀の形は元々残っていたのであろう。その堀全体形は現在まで埋まった部分と共に遺存してきたと考えてよい。それを示すのは、文化5年(1808)の堀浚絵図(ほりさらえそえず・第9図・註7)であり、水の溜まっている部分と溜まっていない部分が明確に記されている。東西堀は



第5図 三之丸堀絵図(第4図の部分)



第6図 高山城下町絵図(一部)

半分程が畑となっており、南北堀の南側は拾四間と表示がしてあるだけで用途は記されていない。

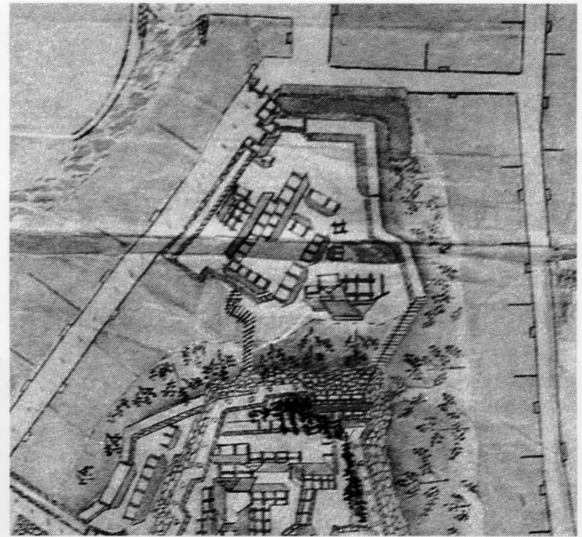
この絵図でも南北堀の東側に道路は見られない。金森転封後、空町一帯の武家屋敷は分割され町民に払い下げられたが、その屋敷割地（註5・21、72頁）があって、それを観察すると南北堀東側に細い道路が出現している。

第8図は昭和17年3月土地大宝典に表わされる堀である。この中でA地点は寺境氏宅の敷地であるが、堀はこの部分にまで及んで（金森当初）いたと考えられる。

以上、まとめると、堀は金森時代後期には南端部分で既かなり埋まっていた、転封後は西側部分が少し埋められたかと思われる。

そして田口郡代の時期に堀浚えが行われた。その時の絵図が第9図「高山城山堀浚絵図（文化5年）」であり、岐阜県歴史資料館に収蔵されている。文化5年当時、水が溜まっているところは水色で表わされ、西側は2枚の畑があって黄色が塗られている。南側にも黄色に塗られた部分があるが、畑とまでは記されていない。

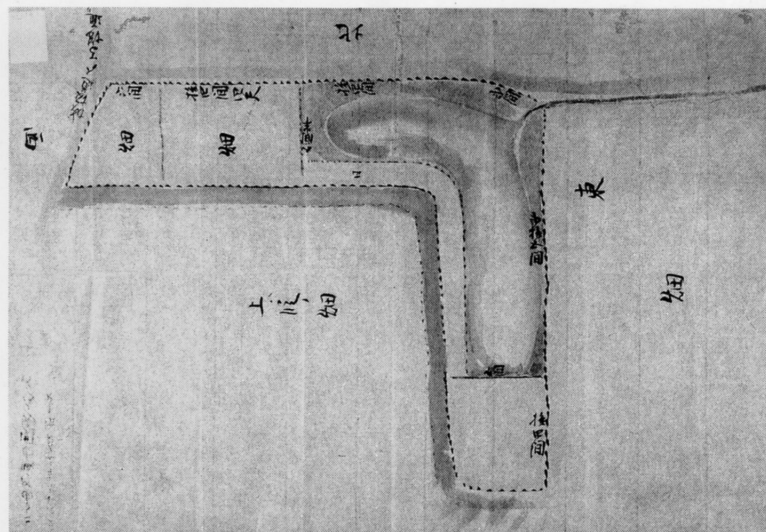
ちなみに、西側の護国神社のところは上段の畑と記され、東側の武家屋敷であった地区も畑と記されている。堀はそのまま現代を迎え、埋まった状態で防水工事が行なわれコンクリート床の堀形となった。堀の幅は、当初かなり広がったのを、転封後の武家屋敷分割払い下げにより南北堀東側に細い通路が新設され、それがだんだん広がってきたのである。



第7図 三之丸部分拡大図



第8図 三之丸堀（土地大宝典より）



第9図 「高山城山堀浚絵図」（文化5年） 県歴史資料館

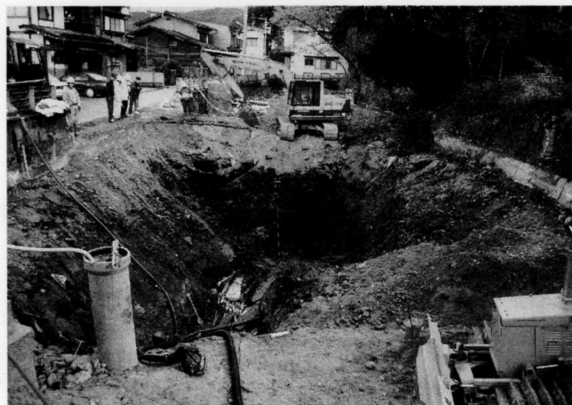
## (2) 堀の発掘調査概要

堀の現況は東西長54メートル、幅11～12メートル、南北は長さ58メートル、幅10～15メートルである。発掘前の予備調査で堀の深さは、堀コンクリート床から4メートルの深さで地山に突き当たっていた。発掘の結果、予想通り4メートルほどの深さで地山に到達したが、現在の道路面からは5メートルの堀の深さとなる。当初の予想では、南北、東西堀とも東西及び南北方向に堀の法面が検出されると考えていた。しかし、トレンチを入れて掘り進んでも一向に法面に当たらず、堀の外側は現況の堀幅よりも広がるとわかった。北側はさほど広がらないかもしれないが、東側は道路の半分以上までが堀幅と考えられ、堀の発掘時には道路側の崩壊がひどく、非常に危険な状況となった(PL6)。道路から5メートルの深さで、安定勾配とすると幅は20メートルとなる。

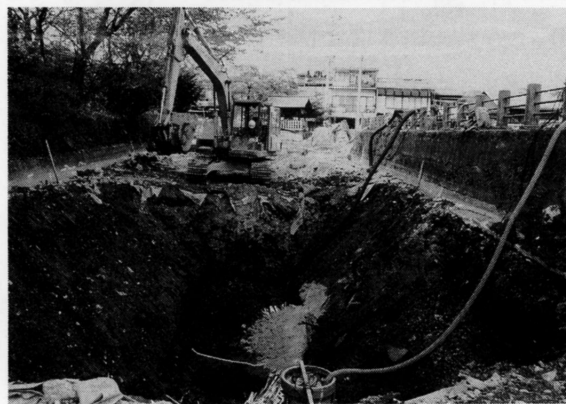
堀の形態は東西堀の底が外に向かって深くなっており、外郭、囲郭に一般的に使用される片葉研堀の可能性もある。南北堀は底が北端で平坦、南側で外に向かって深くなっている。今回の調査では、堀の断面を三箇所調べたが、深さと幅の広さを認識したにとどまった。形態を明らかにするためには北と東の道路を撤去する大工事を前提にしないと無理である。また、堀の内側は、三之丸平坦地の造成により埋立部分があるならば、いくら内側に向かって掘り進んでも地山は出てこないことになる。

現在、三之丸平坦地の北側斜面と東側斜面に通路が残るが、ここは石垣部分の撤去痕跡かもしれない。

(PL5・左端)



PL 4 堀発掘状況 (北から)



PL 5 堀発掘状況 (南から)



PL 6 堀発掘状況 (北から)

### (3) 城郭全体の横断

今回の発掘調査では、堀周辺の測量調査と合わせて本丸及び三之丸の遺存石垣を実測した。それは平成8年度に石垣保存修理と建物敷地跡平坦部の土砂流失防止処置を行なうため、事前現況測量をしたものである。第10、11図は城郭の各遺構を通過する横断面である。また、PL7は昭和46年の高山市街地であるが、国道41号線バ

イパス工事がもう少しで終わろうとしている状況がわかる。この写真でわかるように、高山城は高山盆地を西方向に見渡せる好所に位置している。上空から観察するとわかりやすいが、東の鎌倉街道（後、江戸街道）、西の郡上街道、北の越中街道、南の益田街道（金森時代に整備された）が交差する重要な場所にあり、都市計画上大きな意味をもたせている。



PL7 高山城周辺空中写真（昭和46年）

第10図は、a～eの各横断起点、終点を表すポイントを落とした図で、主な遺構を通過するように定めた。

a-a' でみると、本丸→(-8.9m)→東北曲輪→(-14m)→中段屋形→(-46.6m)→庭樹院殿屋敷→(-26.6m)→勘定所→(-4.0m)→三之丸→(-4.3m)→堀となっている。本丸と二之丸の庭樹院殿屋敷の比高は69.5m、本丸と堀の比高は104.4mを測る。きれいな階段状をなして三之丸～本丸へと連なっていることがわかる。b-b' でみると、本丸と武家屋敷群であった春日町との比高は100.1mである。c-c' では、庭樹院殿屋敷東縁辺に土塁が見られる。d-d' での堀と三之

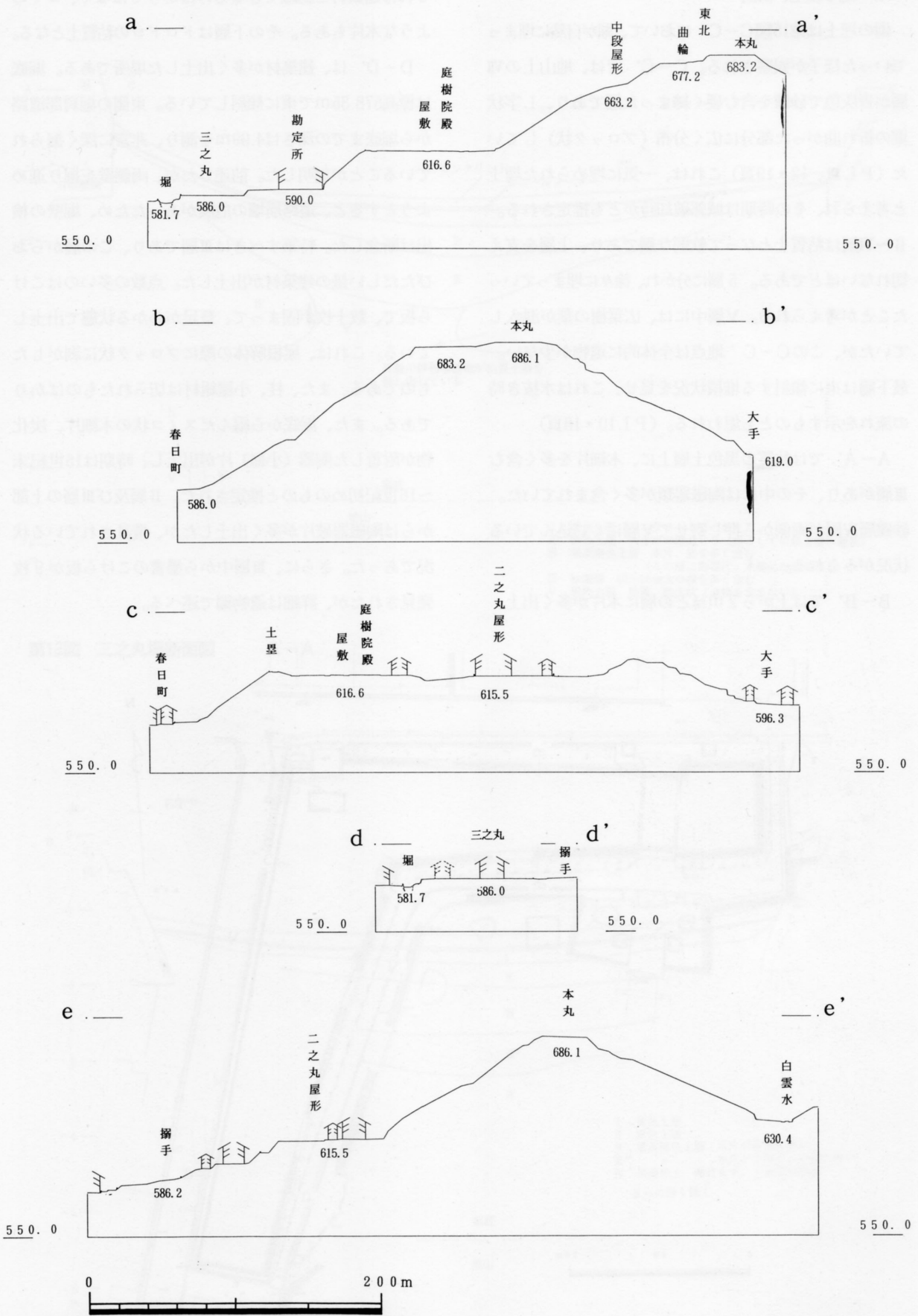
丸との比高は図上では、あまり無いように見えるが、4～5mの段差(堀の現コンクリート底)がある。e-e' には、城の水源地となった井戸の南方に位置する「白雲水」があり、本丸との比高55.7mを測る。

まとめると、大手は三町(商人町)から本丸まで、約110mの高さを昇る。搦手は三町(商人町)から空町(武家屋敷)まで約8mを昇り、武家屋敷から二之丸までは約35mを昇り、そこから本丸までは約70mを昇る。大手、搦手とも武家屋敷群を通過して二之丸、本丸へと通ずる防御機能をそなえた経路となる。



第10図 高山城全体断面図ポイント





第11図 高山城全体断面図

#### (4) 堀の埋土、構造

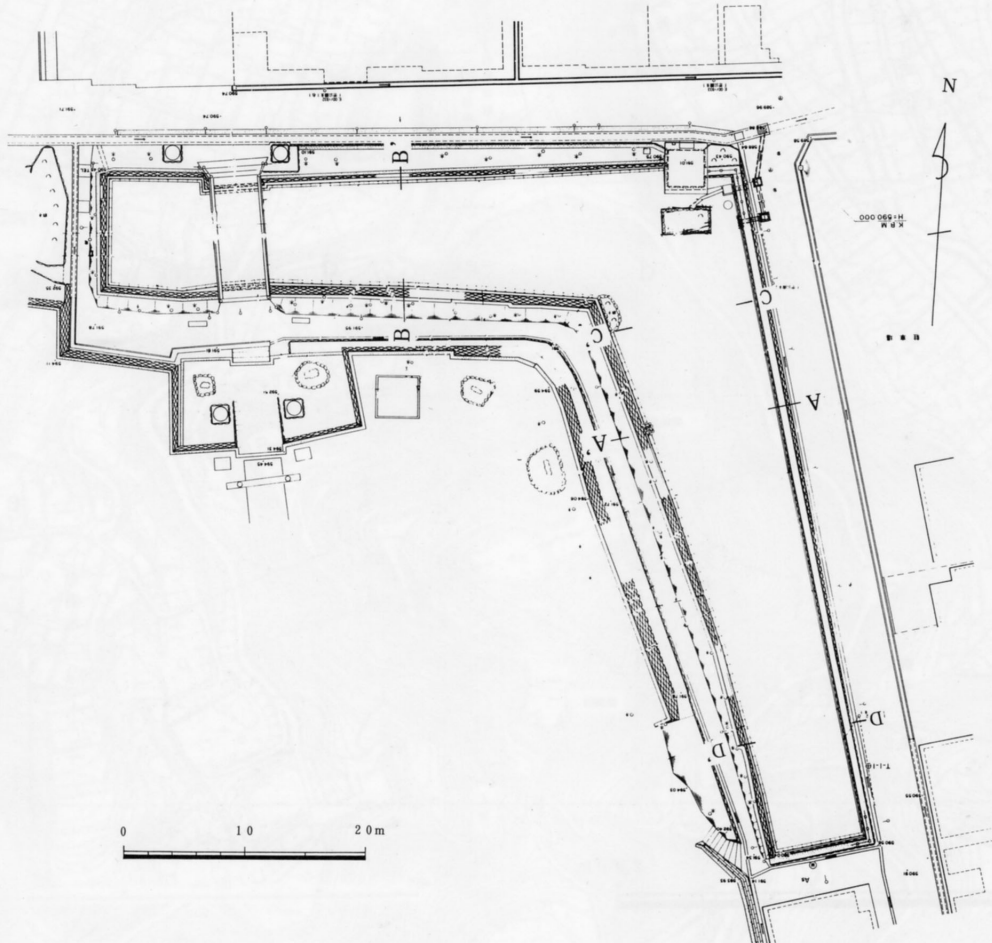
堀の埋土は第15図C-C'において、堀が自然に埋まっていた様子が観察される。C-C'では、地山上のⅦ層が青灰色で砂礫を含む硬く締まった層であり、L字状堀の折れ曲がった部分に広く分布（ブロック状）していた（PL11、12・19頁）これは、一気に埋められた埋土と考えられ、その時期は城郭破却時かとも推定される。Ⅱ～Ⅵ層は粘質土となって軟弱な層であり、上層を支え切れぬほどである。5層に分かれ、徐々に埋まっていたことが考えられる。Ⅴ層中には、広葉樹の葉が混入していたが、このC-C'地点は全体的に遺物が少ない。最下層は東に傾斜する堆積状況を見せ、これは水抜き時の流れを示すものとも思われる。（PL10・18頁）

A-A'では粘質の黒色土層上に、木細片を多く含むⅢ層があり、その中には陶磁器類が多く含まれていた。砂礫層Ⅳ層が両側から押し寄せてⅤ層に食い込んでいる状況がみられる。

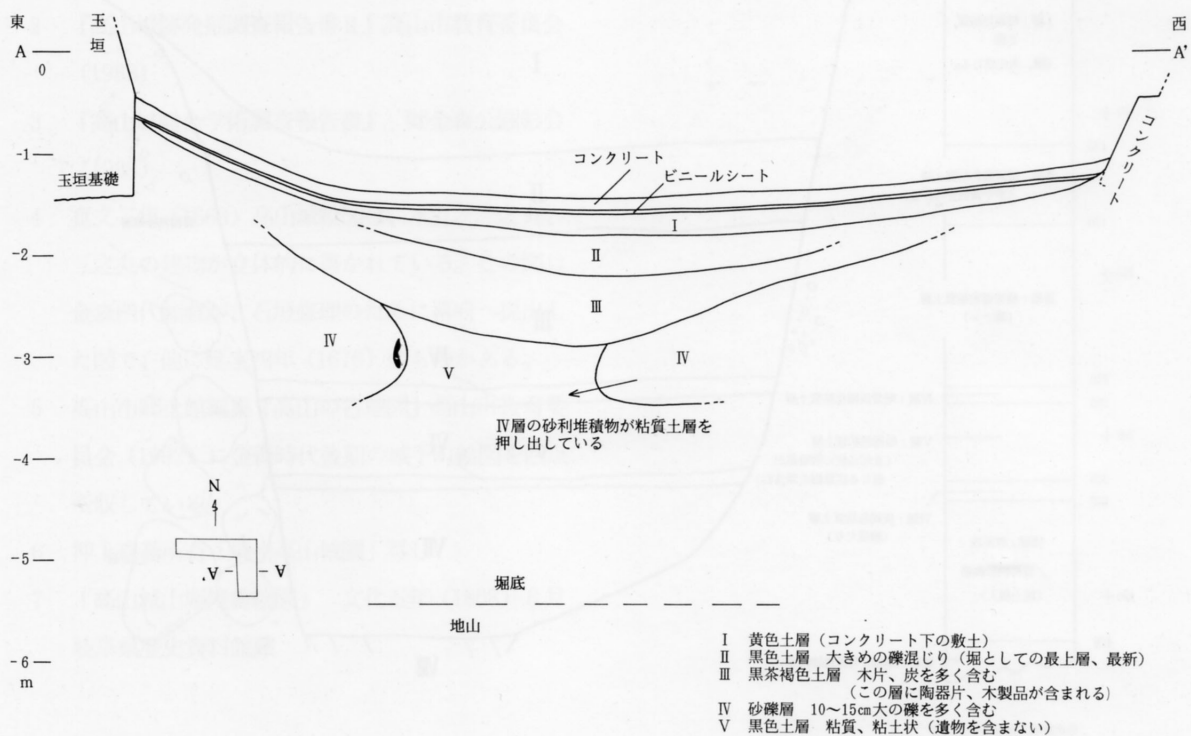
B-B'では上から2mほどの層に木片が多く出土、

それは建築材と認識できるものばかりではなく、ゴミのような木片もある。その下層はドロドロの粘質土となる。

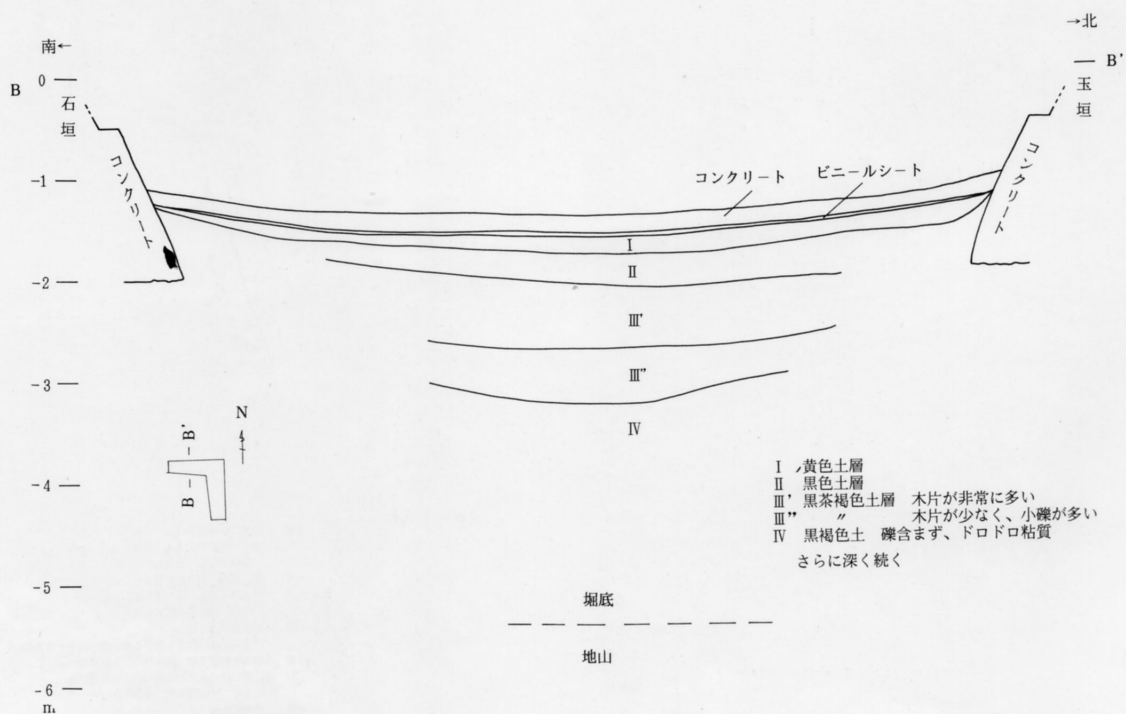
D-D'は、建築材が多く出土した場所である。堀底は標高578.35mで東に傾斜している。東側の堀肩部道路から堀底までの深さは4.99mを測り、非常に深く掘られていることが判明した。前述したが、両側壁を掘り進めようとする、道路崩壊の危険があったため、堀壁の検出は断念した。特筆すべきはⅢ層であり、この層からおびただしい量の建築材が出土した。点数の多いのはこけら板で、数十枚が固まって、茸足がわかる状態で出土している。これは、屋根解体の際にブロック状に剥がしたものである。また、柱、小屋組材は切られたものばかりである。また、堀底から編んだスノコ状の木細片、炭化物が附着した陶器（小皿）片が出土し、時期は15世紀末～16世紀初めのもものと推定された。Ⅱ層及びⅢ層の上部からは陶磁器破片が多く出土したが、攪乱されている状況であった。さらに、Ⅲ層中から墨書のこけら板が9枚発見されたが、詳細は遺物編で述べる。



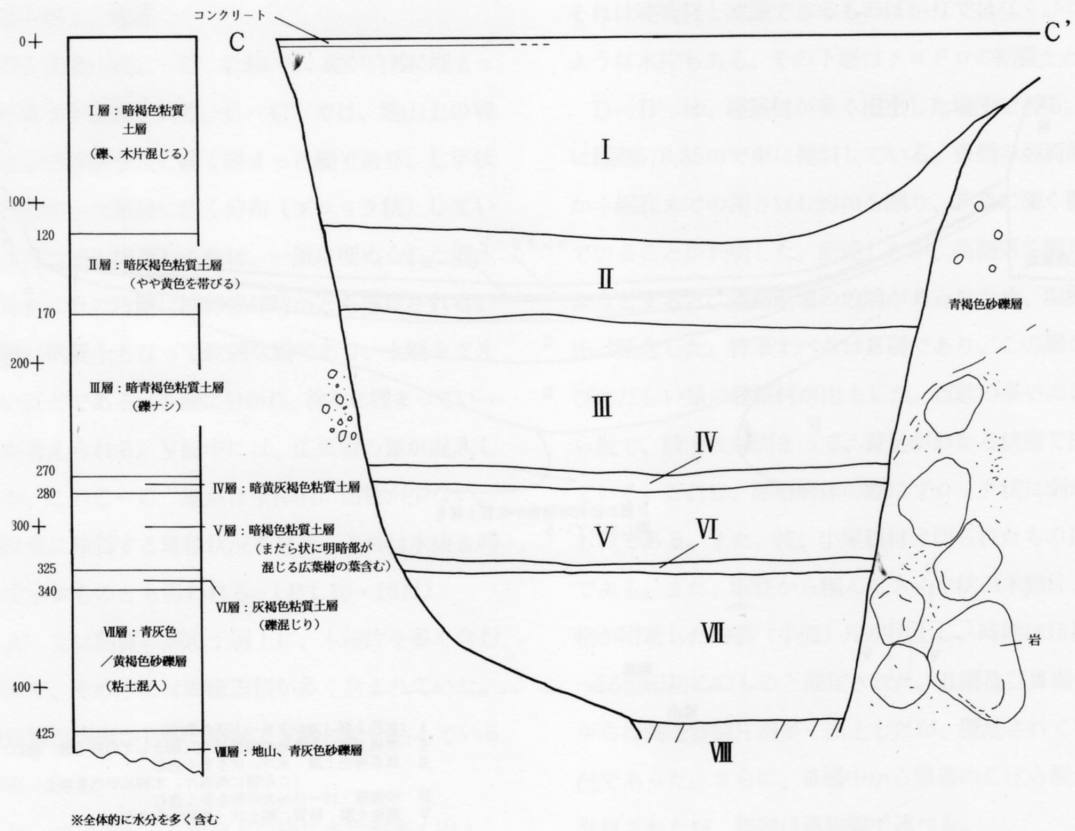
第12図 三之丸堀平面図、断面ポイント



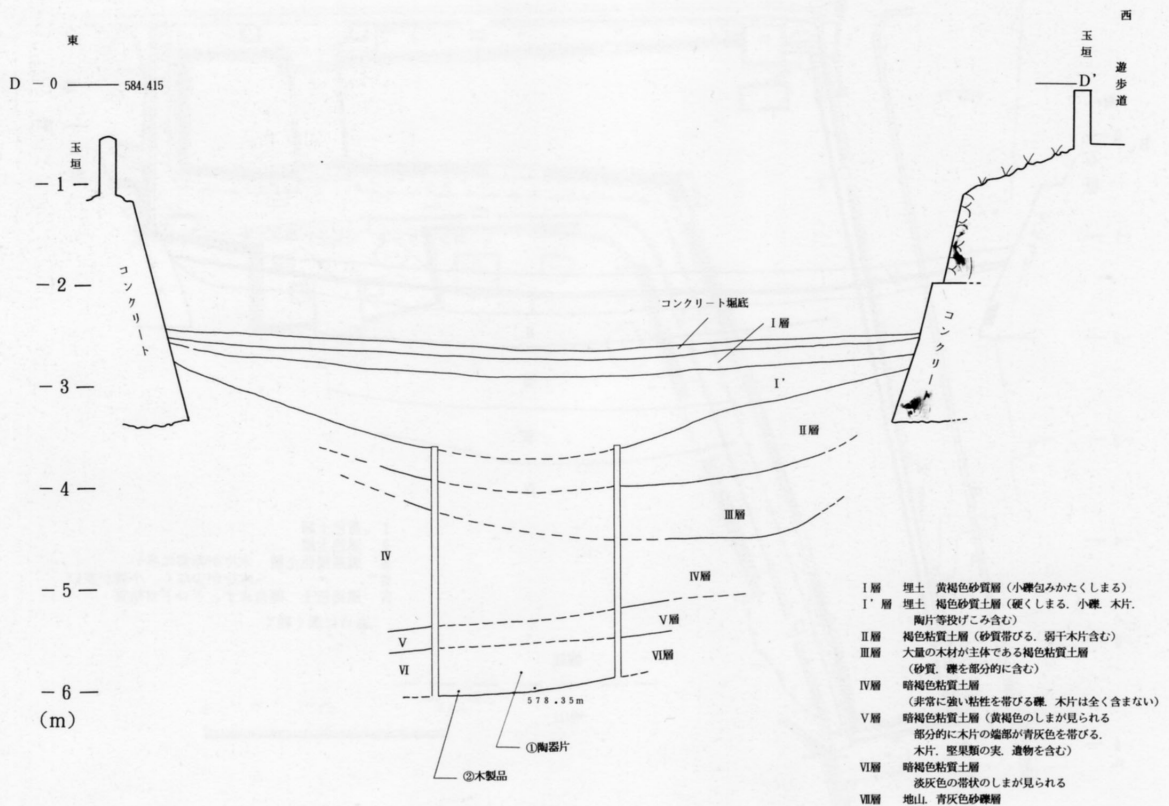
第13図 三之丸堀断面図 A-A'



第14図 三之丸堀断面図 B-B'



第15図 三之丸堀断面図 C-C'



第16図 三之丸堀断面図 D-D'

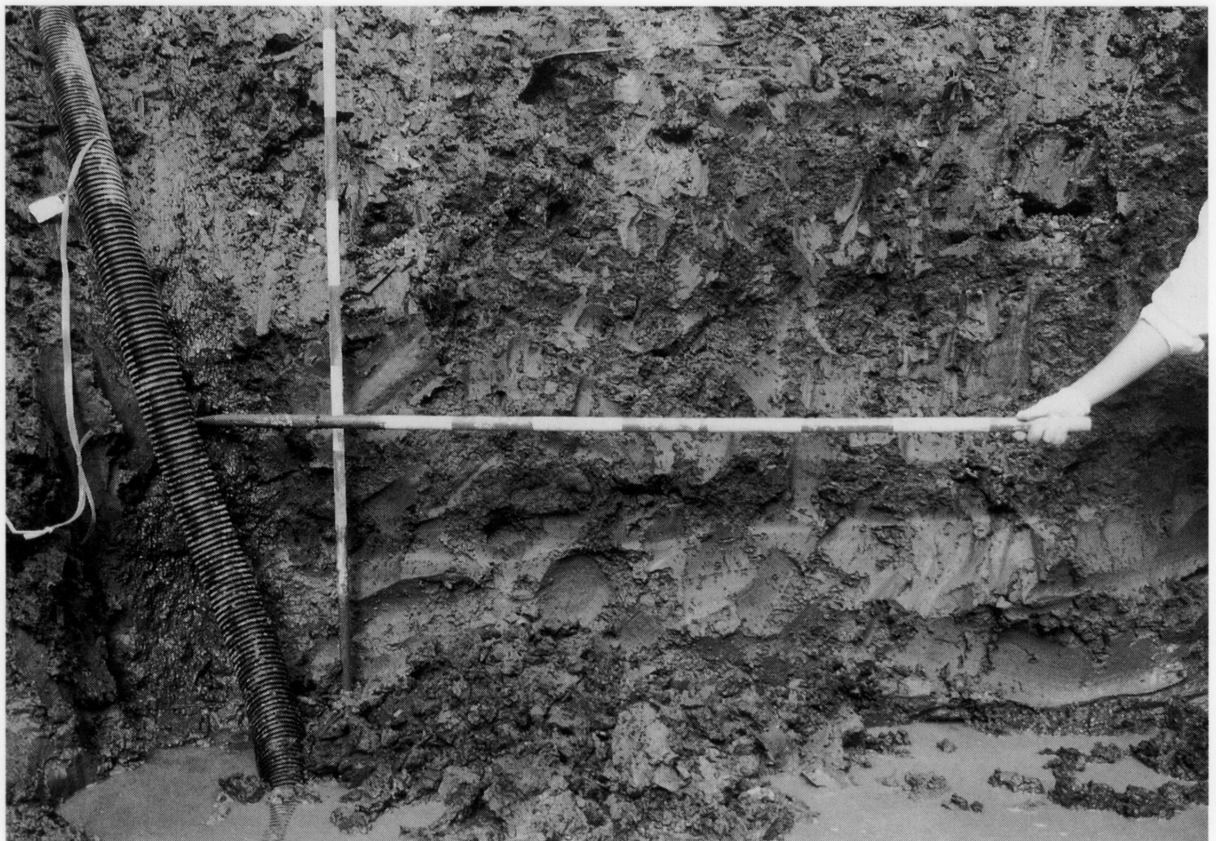
- 註1 『高山城跡発掘調査報告書Ⅰ』高山市教育委員会  
(1986)
- 2 『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』高山市教育委員会  
(1988)
- 3 『高山城総合学術調査報告書』(財)金森公顕彰会  
(1988)
- 4 寛文三年(1663)高山城絵図は、本丸、二之丸、  
三之丸の建物が立体的に書かれている。この図は  
金森四代頼直が、石垣修理のために幕府へ提出し  
た図で、他に延宝四年(1676)のものがある。
- 5 高山市郷土館編集『高山の古地図』高山市教育委  
員会(1992)に金森時代後期の城下町絵図を四点  
所収している。
- 6 押上森喬所有「飛州高山城圖」写し
- 7 「高山城山堀浚籠絵図」文化五年(1808)6月  
岐阜県歴史資料館蔵



PL 8 東西堀 南側の石垣下部、堀壁がまだ出てこない



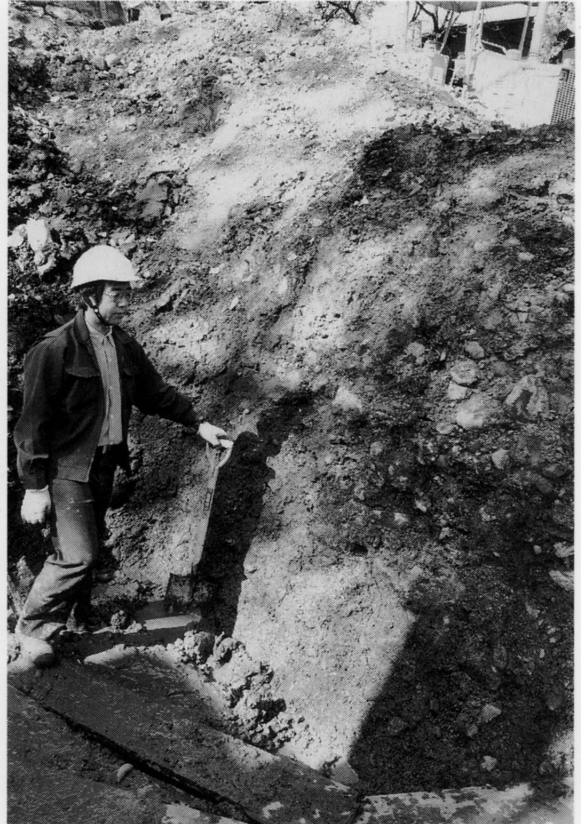
PL 9 南北堀断面 C-C'



PL 10 南北堀断面図 C-C' 東方向に傾斜する堆積層



PL11 C-C'断面附近 砂礫ブロック



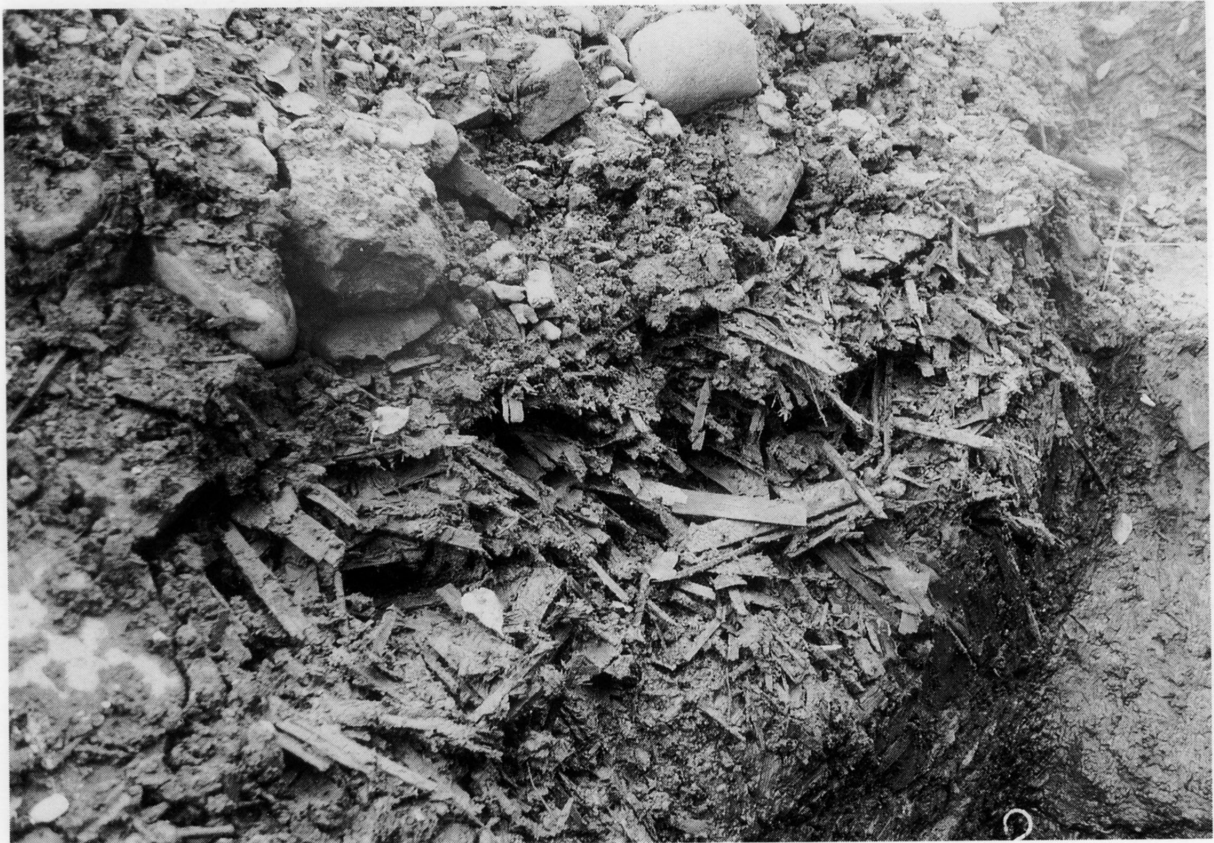
PL12 C-C'断面附近 砂礫ブロック



PL13 堀最下層中の広葉樹 (D-D'断面附近)



PL14 D-D' 断面附近 建築廢材出土狀況



PL15 D-D' 断面附近 建築廢材出土狀況



# 第3章 遺物

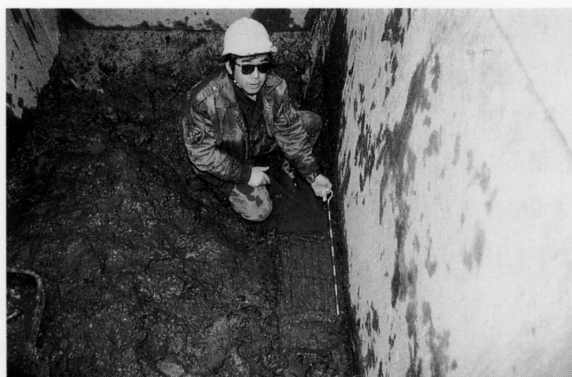
## 第1節 堀から出土した遺物の概要

堀からは16世紀末～19世紀の陶磁器、下駄や碗、木製品が多く出土している。それらは堀の上層部に集中し、下層にはほとんど含まれていない。特筆すべきは南北堀の南端から出土した建築材である。

コンクリートの堀底から105cmの深さに確認され、廃材の堆積は約1メートルに及ぶ(PL15・20頁)。この投棄された廃材はこけら葺の屋根材、六葉、構造材の一部が主体で、一般の町家では使用するものではなく、武家屋敷、寺社建築で使用するものである。しかし、「サルコ」も含まれていることから、クレ葺の材も混入していることになる。こけら葺の屋根材は幅4～9、長さ38～42、葺足3.3～3.5cm(1寸)、板厚は3～4mm(1分)であり、板を止めた竹釘が確認される。また、こけら葺の屋根材が2～30枚固まったままでも投棄されている。この屋根材等を堀に捨てた目的は、何かあったのではないか。焚物にすれば良いのに、わざわざここへ捨てたのは、しかも、こけら葺の屋根材を主体にしている点から考え、排水、土層の安定を図るためこのような処置をしたとも思われる。



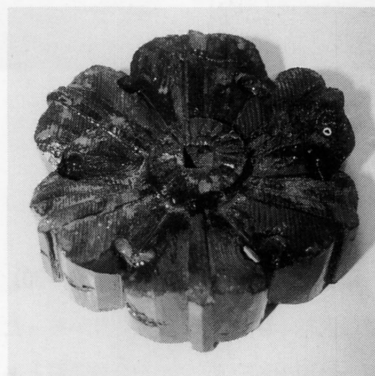
PL18 構造材の切端



PL16 D-D'地点堀底スノコ状木製品



PL17 D-D'地点堀底スノコ状木製品



PL19 六葉



PL20 版木

また、PL17のスノコ状に編まれた木製品は、40cm×3～3.5cmの薄板（厚み2～2.4mm）を8枚程編んであるが、下部に折り曲げられてもう1枚分あり、全部で16枚程編んである。セイロの底に使われるスノコのような働きをさせたものと考えられる。

PL18の構造材は、実際に使用されていた材の端部を切りとって投棄したもので、1.5m以上の材は2～3本のみである。棟、隅木などの部分が見られるが、建物の部材を全て投げ込んだのではなく、ある程度選択して投棄したものと思われる。

PL21、22は幅5～12cm、長さ149cm、厚み2～4mmの薄いこけら板で、葺足は3.3cm前後（1寸）と一定している。屋根の一部に使用されていた痕跡も、葺足部に



PL21 145cmと長いこけら板出土状況

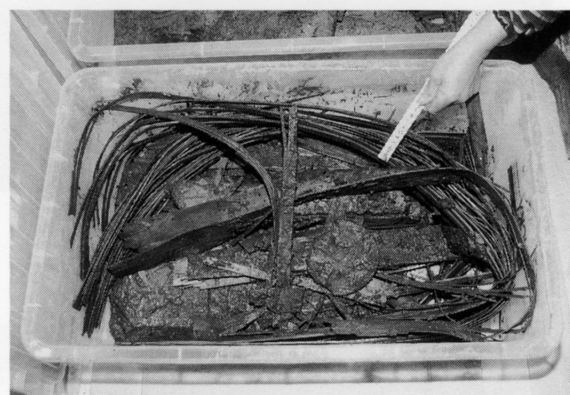
見える。

PL19 (21頁)・第17図 (25頁) の六葉は、直径16.8cm、厚さ4.6cm、樽の口穴1.4×1.4cmを測る。菊座は検出されなかった。

六葉の寸法から推定すると、六葉寸法を3倍してそれをさらに2分の1にし、それを10倍にしたものが六葉の配される妻の柱間である。式を表すと次のようになる。

$16.8 \times 3 \div 2 \times 10 = 252.0\text{cm}$  (8尺3寸1分) また、この六葉の寸法から推察して1間ほどの建物としか考えられない。

PL20は、様々な紋を並べた版木であり、27.3×11.2cm、厚み1.0cmである。用途はよくわからない。



PL22 145cmと長いこけら板

## 第2節 墨書があるこけら板 (PL23～30)

大量の屋根板材の中に、9枚の墨書があった。

①一面に、戸田山城守殿 黒田甲斐守殿とあり、

もう一面には □前□前戸田山城様 戸田山山  
戸田山 戸田 と書く。

②一面に、鹿内甚三郎、もう一面に、内藤□

③左字で、松色見事や 上方道 松に柳はうへませる

見事乃一杉為給 見事乃一□ とある。

左字は、裏返しに書いているもので、その意図はわからない。

④一面に、右此条、常に心に可弓馬

もう一面には、□□□□婚事盤 (武士?)

の道次□□専 とある



PL23 墨書①、②

⑤一面に、秋風起 白雲飛

もう一面に、□とセイ□つ□□と思へと

きな□たのあひみん

□のかさりなきかな とある

⑥一面に、御上屋舗 黒田甲斐守殿と

屋舗□□□田中

□□□□□□渡り

屋舗 □□□□事

□仰 □内殿

今四日之御状相違

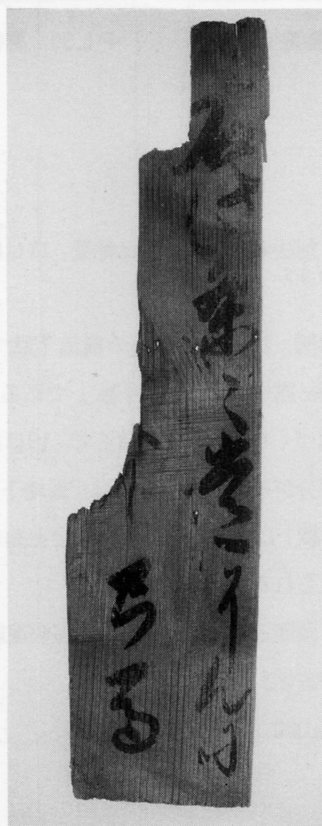
昨日□□□今四日 とある

⑦～⑨割れた細片のため判読不能

この墨書がある板は、前述のこけら板材寸法と同じで、こけら葺の屋根の固まり中から発見されたものである。墨書の後に、確かに屋根材として使用している。各こけら板は竹釘で止めてあるため、板に釘穴が多く見える。屋根葺師、大工が書いたいたずら書きか、普請奉行か、定かではないが、江戸時代の筆字である。



PL24 墨書③



PL25 墨書④-1



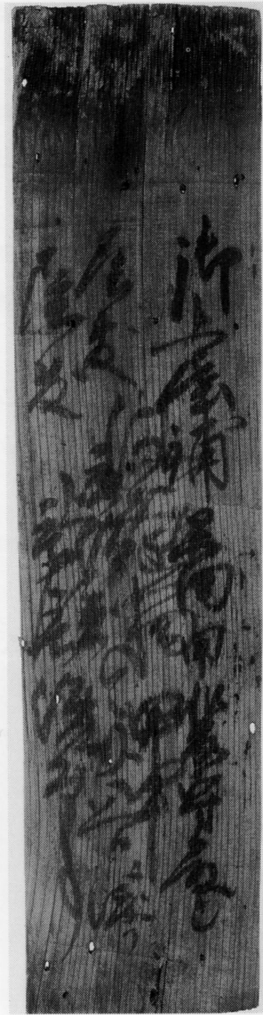
PL26 墨書④-2



PL27 墨書 ⑤-1



PL28 墨書 ⑤-2



PL29 墨書 ⑥-1



PL30 墨書 ⑥-2

### 第3節 出土遺物木製品 (第17~19図)

第17~19図に主な木製品をあげた。木製品は堀の水に漬かっていたため、全体的に遺存状態は良い。

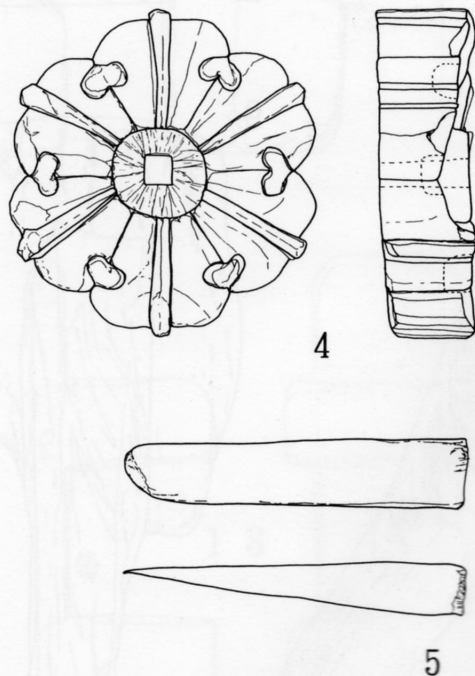
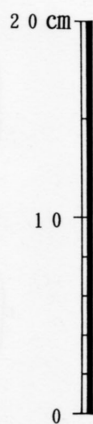
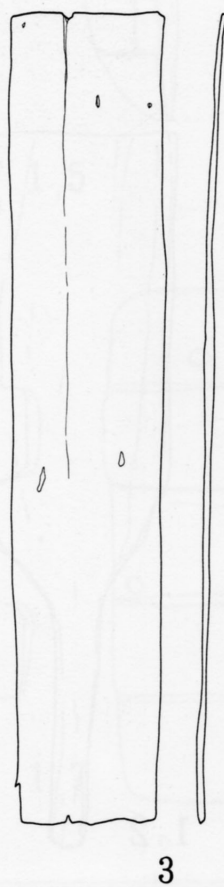
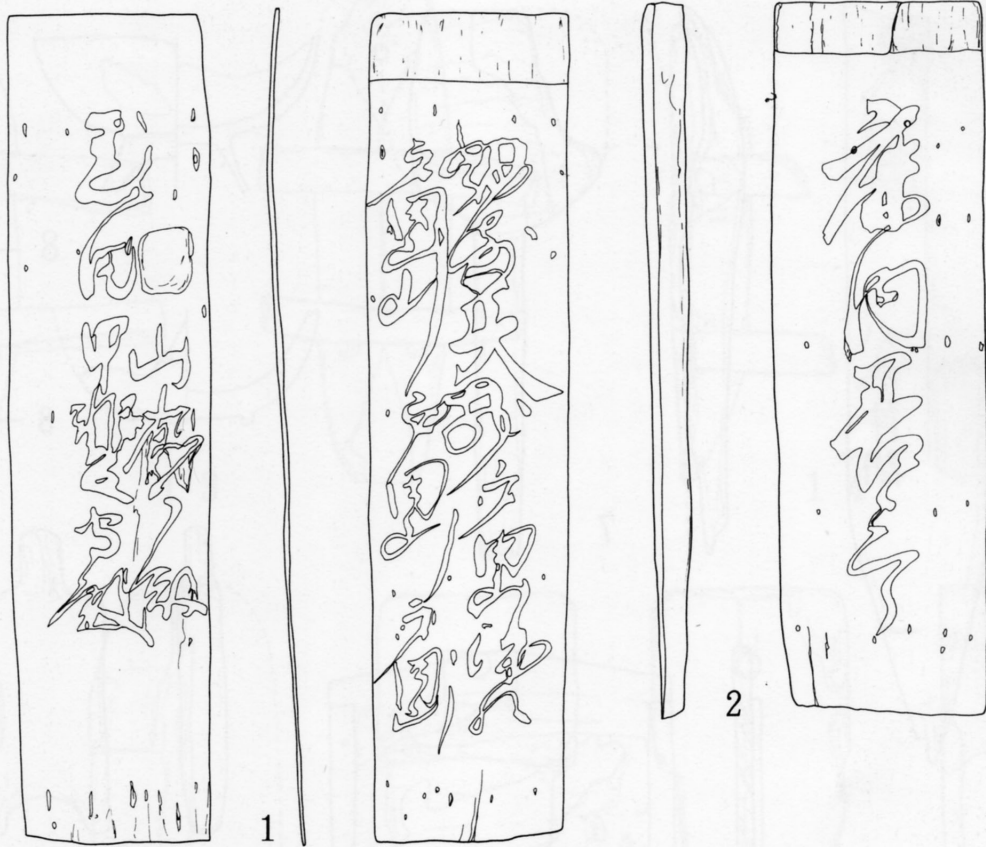
(1) 第17図 1、2は墨書のあるこけら板で、屋根に使用されていた風化痕跡がよく見える。厚さは3~4mm、(1分) 葺足は3.3~3.5cm (1寸) である。記されている内容は22頁に述べている。3は普通のこけら板であるが、出土したどのこけら板も竹釘の穴が観察される。4は六葉 (22頁に詳述)、5はヌキ用のクサビ(?)で、幅が3.5cmと広い。

(2) 第18図 6は□組 八人仲間と墨書がある矢板状の木札で、厚みは2mmと薄い。7はシャクシ、8-1は塗椀、8-2は白木の椀である。9は板絵馬で犬が描かれているようであり、左下には年号、寄進者が記され

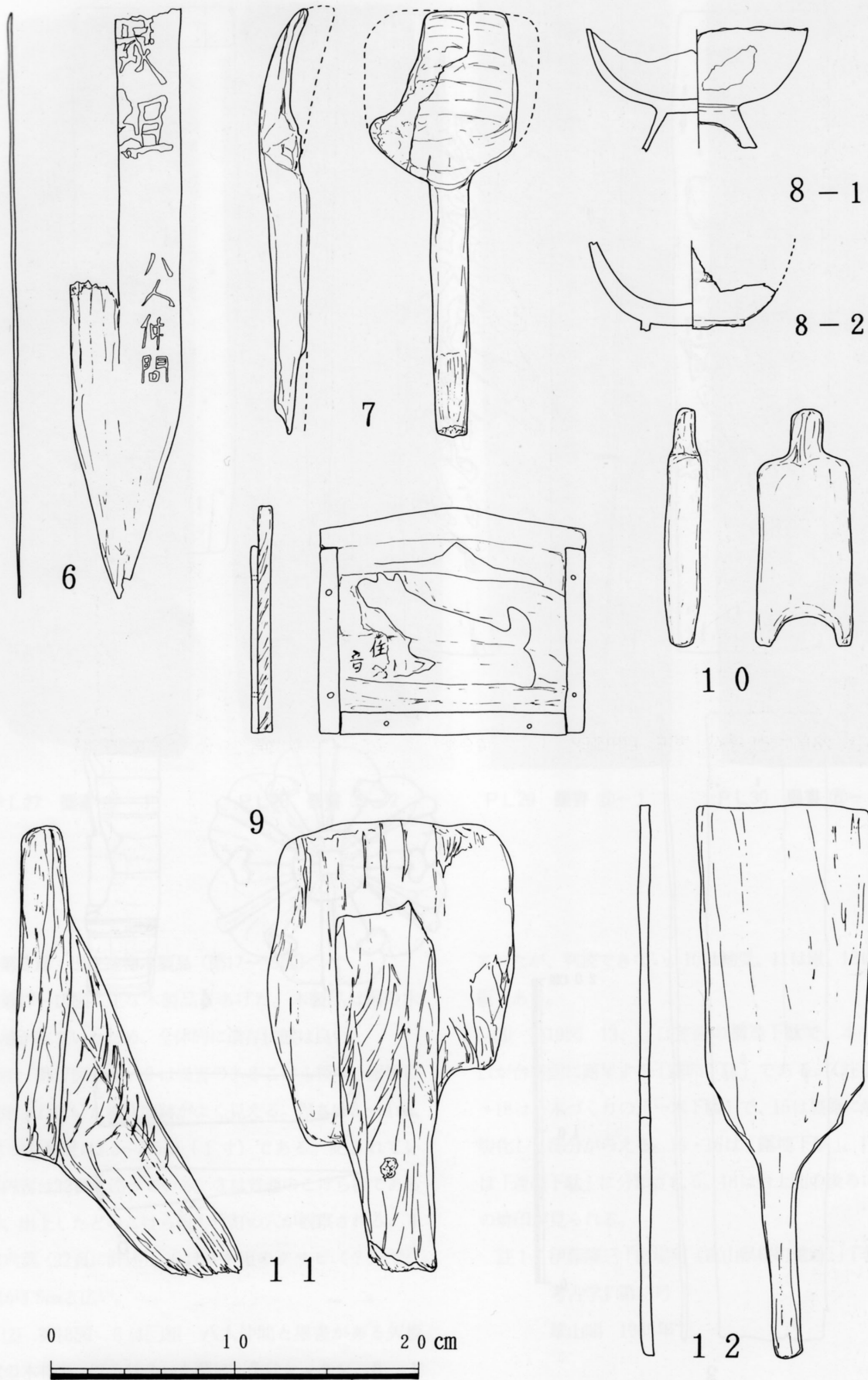
ていたが、判読できない。10は軸受、11は鎌、12は羽子板である。

(3) 第19図 13、14は差歯の構造下駄で、ホゾの木口が台表面に露呈する「露卯下駄」である。(註1) 15~18は一本づくりの「一本下駄」で、15は裏側に焼けて炭化した部分が見える。15・16は「露地下駄」、17・18は「連歯下駄」に分類される。18は台上面の後ろに×印の焼印が見られる。

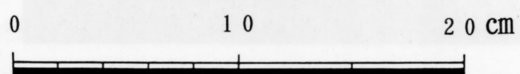
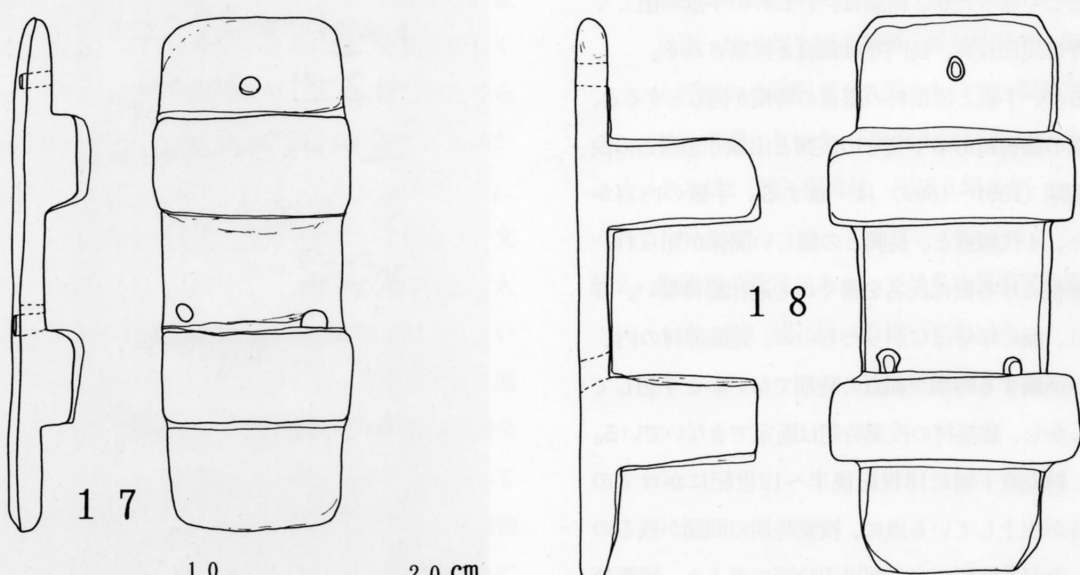
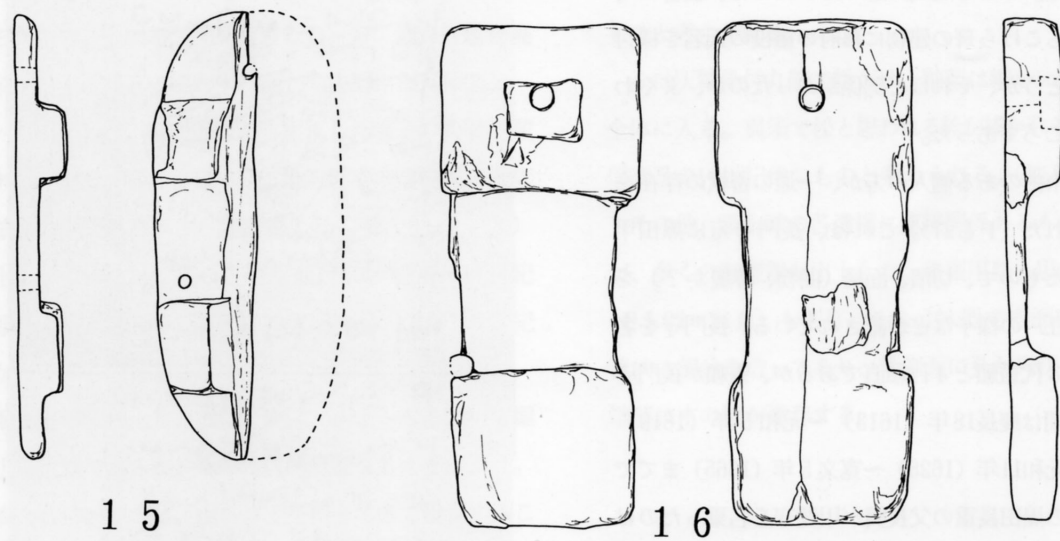
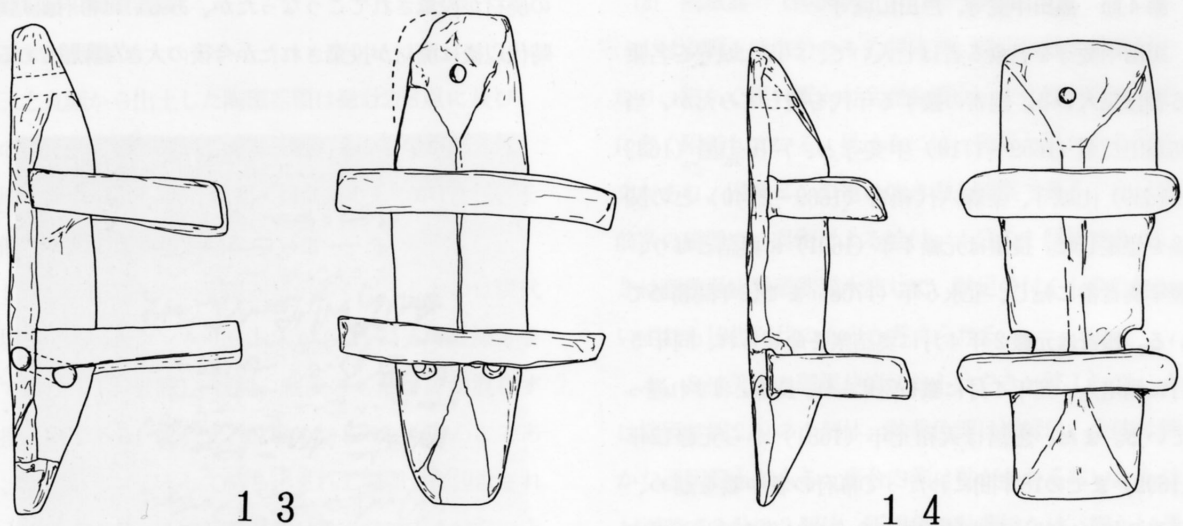
註1 伊藤隆三「宿場町 (富山県桜町遺跡)」『季刊考古学』第13号  
雄山閣 1985年



第17图 木製品実測图1



第18図 木製品実測図2



第19図 木製品実測図3 13・14 構造下駄、15~18 一木下駄

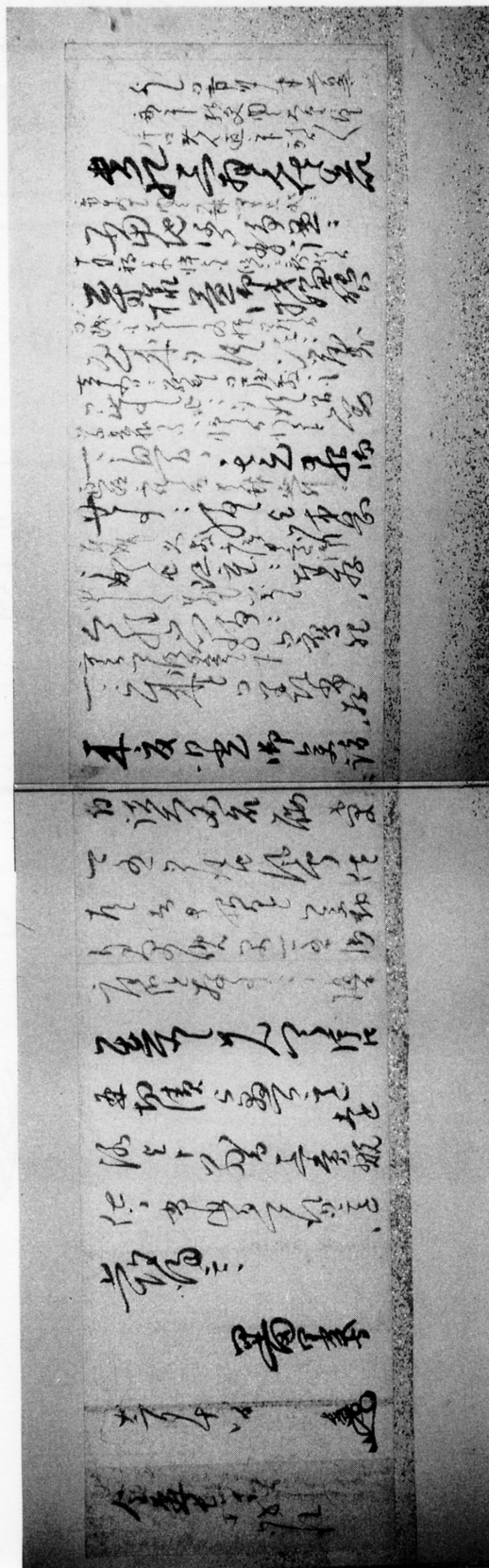
#### 第4節 黒田甲斐守、戸田山城守

黒田甲斐守を名乗る者は七人いて、戸田山城守を名乗る者は二人いる。両者の接する年代を捜してみたが、当初黒田長重（1659～1710）甲斐守と、戸田忠昌（1632～1699）山城守、金森六代頼峯（1669～1740）との関係を想定した。長重は元禄4年（1691）に奥詰となり、翌年奏者番に転じ、宝永5年（1708）まで16年間務めている。頼峯は元禄2年4月に奥詰衆を命ぜられ、同年5月に側用人、翌年4月に職を免ぜられ、長重とはすれ違っている。また、忠昌は天和元年（1681）から元禄12年（1699）までの18年間にわたって幕府の老中職を勤め、元禄8年（1695）高山城破却の命令書に名を連ねた老中の一人である。ここで疑問に思っていたのは、頼峯の時代に、仮にもこけら葺の建物に幕府の重役の氏名を様付けで書くかどうか、それほど関係があったのか、よくわからないところであった。

しかし、市内のある個人の方が、一通の書状の存在を知らせてくれた（P L27）。これは、長門守宛に黒田甲斐守が書いたもので、切漬、面桶（曲物、春慶か？）を贈った礼、江戸の様子などが記されている。長門守を名乗ったのは3代重頼と4代頼直であるが、重頼が長門守であった期間は慶長18年（1613）～元和5年（1619）で、頼直は元和11年（1625）～寛文5年（1665）までである。前述の黒田長重の父長興が甲斐守を名乗ったのは寛永3年（1626）から寛文5年（1665）までである。少しややこしくなったが、結論は、P L27の手紙に出てくる甲斐守は黒田長興、長門守は頼直と推察される。

ちなみに、手紙と屋根材の墨書の時期が同じとすると、こけら板の墨書にある甲斐守の長興と山城守忠昌との役職在任期間（1681～1699）は一致する。手紙の内容からすると、4代頼直と、長興との親しい関係が知られ、建物の屋根こけら板に氏名を書くのも違和感はない。これにより、板に年号はなかったものの、建築廃材の内、屋根材が所属する時期が頼直の時期でないかと予想している。しかし、建築材の投棄時期は断定できない。それは、材の直下層に18世紀後半～19世紀にかけての陶磁器片が出土している点に、投棄時期の問題が残るのである。金沢藩作製三之丸堀周辺絵図で見ると、建築廃材が捨てられていた部分がある程度埋まっている状況だと前述した。しかし、この部分に、元禄8年城郭破却時

の廃材が投棄されてこうなったか、あるいは幕府直轄地時代以後に廃材が投棄されたか今後の大きな課題である。



P L27 黒田甲斐守書状 奥詰付宛



## 第5節 陶磁器類

### (1) 出土層位

三之丸堀から出土した陶磁器類は総計288点に及び、その内美濃系のものが37.5%、肥前系のものが36.1%、在地系のものが8.6%、京都・信楽系のものが1.7%、その他・不明が16.1%である。

しかし、前述したのが陶磁器類が多く出土したのは現代の堀底であったコンクリート床から1～1.5mの深さまでであり（Ⅰ～Ⅱ層）、戦前、戦後のものまでが混在する攪乱層である。割れて、投棄したものがほとんどであり、周辺からゴミとして持ち込まれて堀埋土に含まされたと考えられる。その投棄時期はそんなに古くはないと考えられる。

その中で、土層断面図を取ったD-D'地点（建物廃材多量出土地点）の堀底上15cmから志野平皿（挿図20-1）が出土した。堀底近くから出土した唯一の陶磁器類である。また、同じくD-D'地点近くの建物廃材投棄堆積層の中間あたりから陶磁器2点（挿図20-2、3）が出土している。堀底の志野平皿は16世紀末～17世紀初頭、建物廃材の中の磁器は18世紀後半～から19世紀にかけてのものである。

陶磁器類の出土した層は、挿図20-1～3を除いて堀の上部土層であるが、その時代的変遷を考えてみよう。金森時代においては、堀へゴミを持ってきて投棄することはまず考えられず、陶磁器類があったとしても極わずかであろう。幕府直轄地になってからは、堀周辺の武家地は町民に払い下げられたが、さらに堀の東側に新しく道がつくられ、城郭破却もあっていろんなものが捨てられ、堀は荒れていったのである。後、文化5年に大がかりな堀浚え（9図・9頁）を行なって泥を上げている。この時に、堀の埋土はかなり攪乱されているだろう。文献史料でわかるのはこれぐらいであるが、堀の埋土は大きく分けて上層は木材や木製品、陶磁器類が混入しているが、下層は遺物を含まない粘質の暗・灰褐色土層で堀全体に及んでいる。その中の最下層土層中の遺物を堀全体にかけて調査したが、湧水と土砂崩壊にさえぎられて挿図20-1平皿以外は確認できなかった。堀下層に遺物が少ないのはこの下層が城郭破却前にある程度堆積していたものと考えられる。

### (2) 陶磁器（挿図20・P L28～32）

1は志野平皿2分の1の個体で、暗灰白色の釉薬がかかり、細かく黒い貫入が全面を覆う。炭化物が内面と底に多く附着している。見込みには、菊花と思われる印花文があり、円錐ピンの重ね焼き痕も観察できる。2は肥前系の磁器で、呉須による絵付、4分の1個体である。3は肥前系灰釉磁器質水注しで、獣足の付くものである。いずれも19世紀代のものと考えられる。

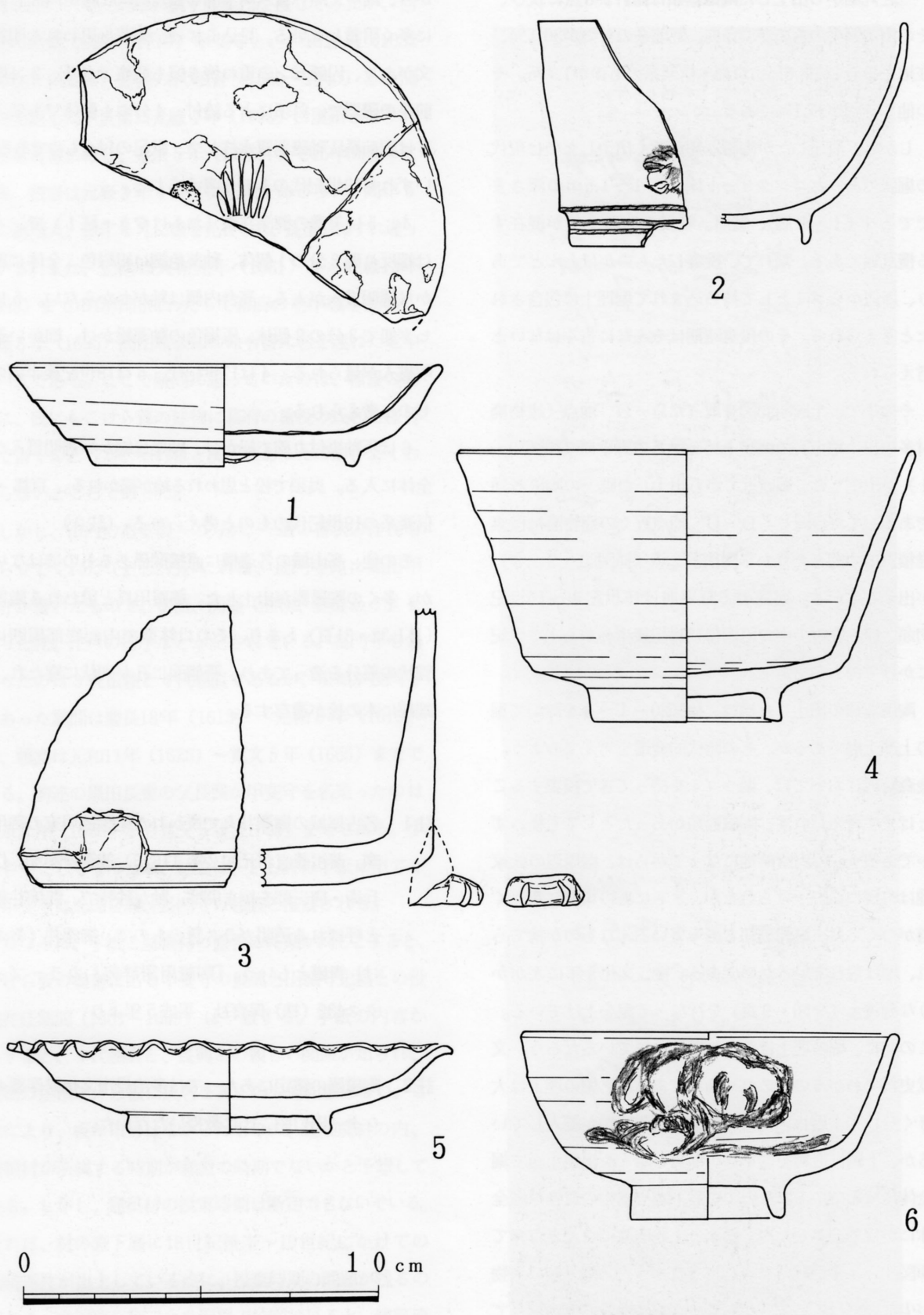
4、5は美濃の御深井焼（おふけやき・註1）で、4は端反り碗2分の1個体、釉薬色調は褐緑色、全体に細かな透明貫入が入る。高台内側は釉がかからない。5はヒダ皿で3分の2個体、灰褐色の釉薬総かけ、細かい透明貫入が見られる。4は17世紀代、5は18世紀後半頃のものと考えられる。

6は灰釉染付丸碗で総かけ、釉薬は細かい透明貫入が全体に入る。呉須で松と思われる絵が描かれる。京都・信楽系の19世紀代のものと考えられる。（註2）

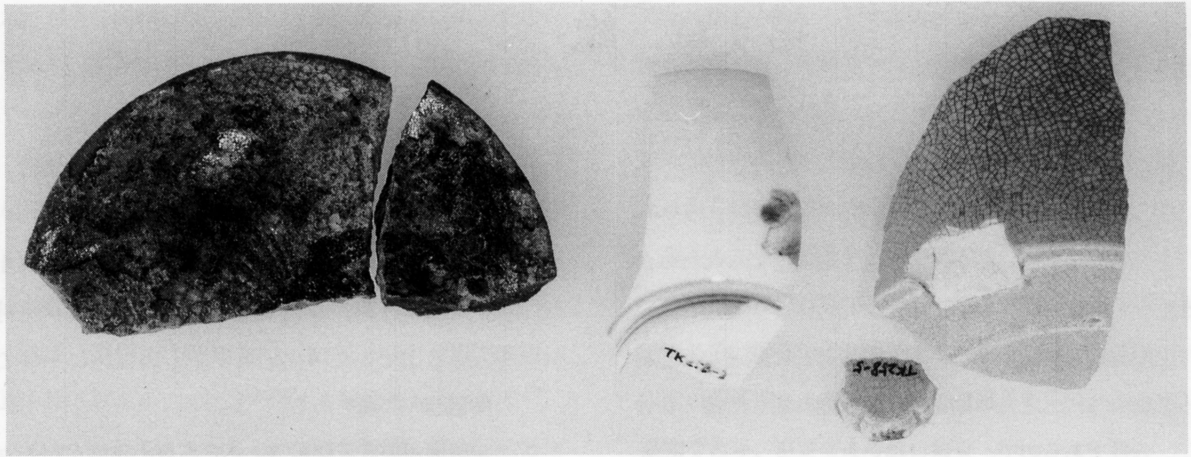
その他、高山城の各遺構に直接関係あるものではないが、多くの陶磁器が出土した。養蚕用具と思われる陶器（P L32・31頁）もあり、それは鉢型で内面底部周囲に管状の部分造ってあり、管側面に孔が列状に穿たれ、端部に木の栓が遺存する。

註1 名古屋城の御深井丸で焼かれた尾張徳川家の御用窯。藩祖義直が元和2年（1616）美濃の陶工、仁兵衛・唐三郎を招き開窯。釉が独特で、御深井釉と呼ばれる透明ガラス質のもので、御深井（おふけ）青磁ともいう。『陶磁用語辞典』カラーブックス432（株）保育社 平成5年より

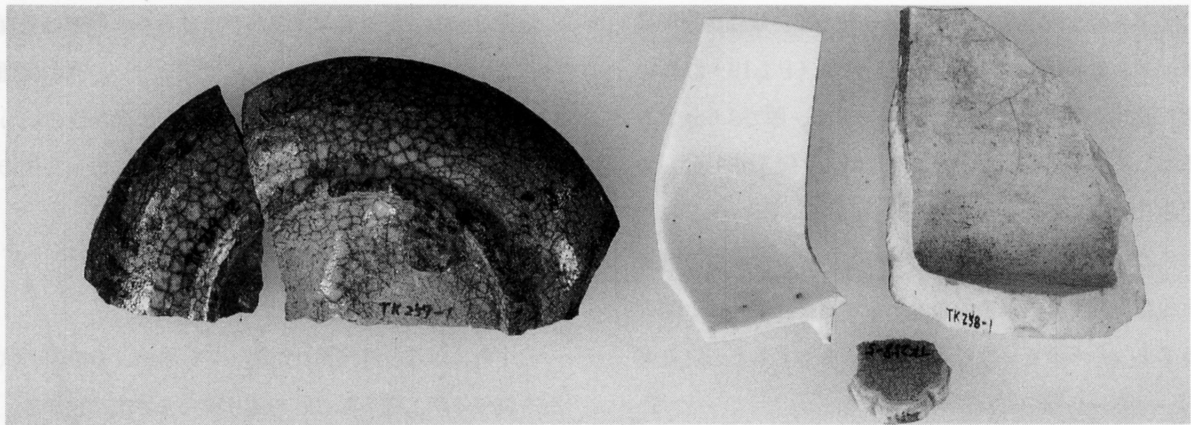
註2 陶磁器の鑑定にあたっては多治見市文化財保護センター田口昭二氏に教授いただいた。



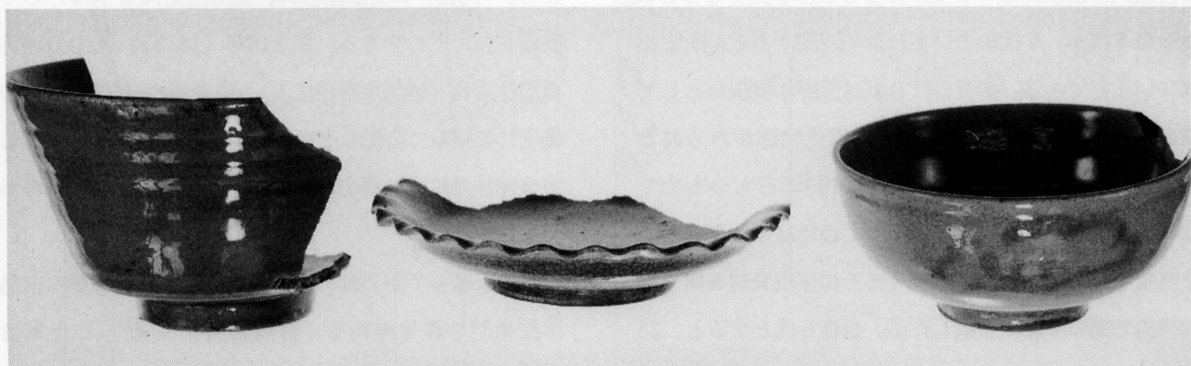
第20図 出土陶磁器 1 堀底 2・3 建築廃材中 4~6 攪乱層



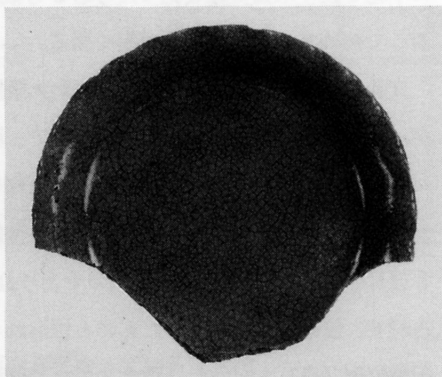
PL28 20图 1~3



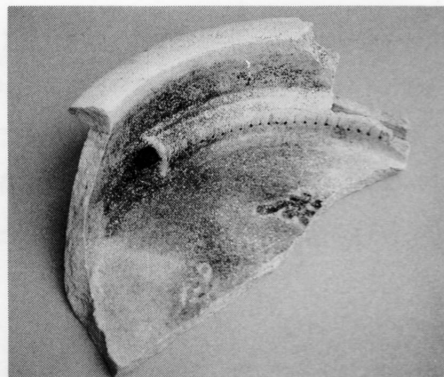
PL29 20图 1~3



PL30 20图 4~6



PL  
31  
20  
图  
5



PL  
32  
鉢

## 第4章 総括

### 第1節 建物の推定

#### (1) 遺物からの推定

どんなこけら葺建物が、壊されて堀に捨てられたのか推定をした。

①南北堀の南端上部にあった黄金神社に関連する建物

②金森時代三之丸の勘定所、又は堀に面した櫓（こけら葺であるので、米蔵は除いた）

③島川原町周辺の武家屋敷等、こけら葺の建物

こけら葺は町家には使用しないもので、城郭建物か武家屋敷、或いは寺社建物である。六葉（P L19・21頁、第17図・25頁）の寸法は、直径16.8cm、厚さ4.6cmであるが、この直径すると、梁行2.52m（8尺3寸1分）の建物と推定された（詳細22頁）。しかし、桁行がどれだけあるかは、六葉寸法ではわからない。また高山の宮大工の意見だと、六葉の大きさからすると、妻側は1間のみであったろうということである。そうすると三之丸堀沿いにあった櫓の可能性がでてくる。

ここで問題なのは、28頁に記したが、黒田、戸田両名幕府役人の名前がこけら板にあることは事実であるものの金森4代か、6代かのいずれかの時期であるか断定出来ないことである。墨書こけら板は実際に屋根材として葺かれていて、10～20年ぐらいの風化痕跡がみられるが、覆い屋根の下に無い限り50年、100年ももつものではない。金森4代の時期に櫓を壊すのでは早すぎるし、それならば櫓の屋根だけ葺替えてその屋根廃材を何らかの目的で堀の一部に投棄したか。金森6代とすると、28頁に記した黒田甲斐守から金森出雲守宛の手紙に整合しないが、城郭破却時に櫓廃材を投棄したと考える方法もある。

建築廃材は全てここに一括破却されたのではなく一部が持ち込まれている。こけら板が大部分を占めるが、屋根の垂木は見つかっていない。何もかもゴミをすてるようにここへ投棄したのでは無く、何らかの目的を持っていたと考えたい。

#### (2) まとめ

①の黄金神社は調査の結果、本殿ではないことがわかっ

た（後述）。しかし、覆殿、水無神社の古神楽殿等未調査であり、まだ捨て切れない。

②の城郭建物の可能性は大いにある。しかし、金森4代か6代の時期かはまだ検討を要する。さらに廃材中程から出土した18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器の問題もある。

③の空町周辺の武家屋敷等、こけら葺の建物だがこれは新しい史料が期待できそうにない。

以上3つの可能性を考えたが、こけら板の墨書は金森4代または6代に関係あることに間違いはない。後の課題は、どこにあった建物か？投棄時期はいつ頃か？ということになる。今の時点では、三之丸堀沿いにあった櫓の可能性があると指摘するに留めたい。

### 第2節 黄金神社の歴史

三之丸には現在護国神社が建っているが、その前の状況を調べる内に様々なことを知り得たので次に記する。

黄金神社は、金森時代、鉱業開発祈念のため慶長年間（1596～1615）に金山毘古神、金山毘売神を主神として勧請されたものである。寛永18年（1641）、鉱山の功労者茂住宗貞（越前大野の住人）、宮島平左衛門（金沢の藩士）を相殿に合祀しているが、この金森時代における黄金神社の位置は高山城内にとあるだけで、位置はわからない。

幕領となってからは、延享2年（1745）古城跡に宮島平左衛門の霊を慰める「宮島霊神」を祀ったとある（『飛州志』）が、その場所は特定できない。明和年間（1764～72）、八賀町（現丹生川村）の渡辺伊兵衛が二之丸に小祀を設け宗貞の霊を祀ったとある（『紙魚のやとり』）。ここで初めて二之丸の場所が出て来る。

文政2年（1819）3月2日、一之町大阪屋太右衛門らが、二之丸の小祠が落ちぶれているので、堀の北面平地に再興したいと御役所へ願い出たが、新祠を建てることは許されず、翌年堀の上に祠を建て金の神祭（5月4、5日）を執行したとある（『紙魚のやとり』）。この祠が、古祠で、覆殿のみを新築したものと思われる。この時に、堀端町側（東）へ向いた社殿となった（第21図）。

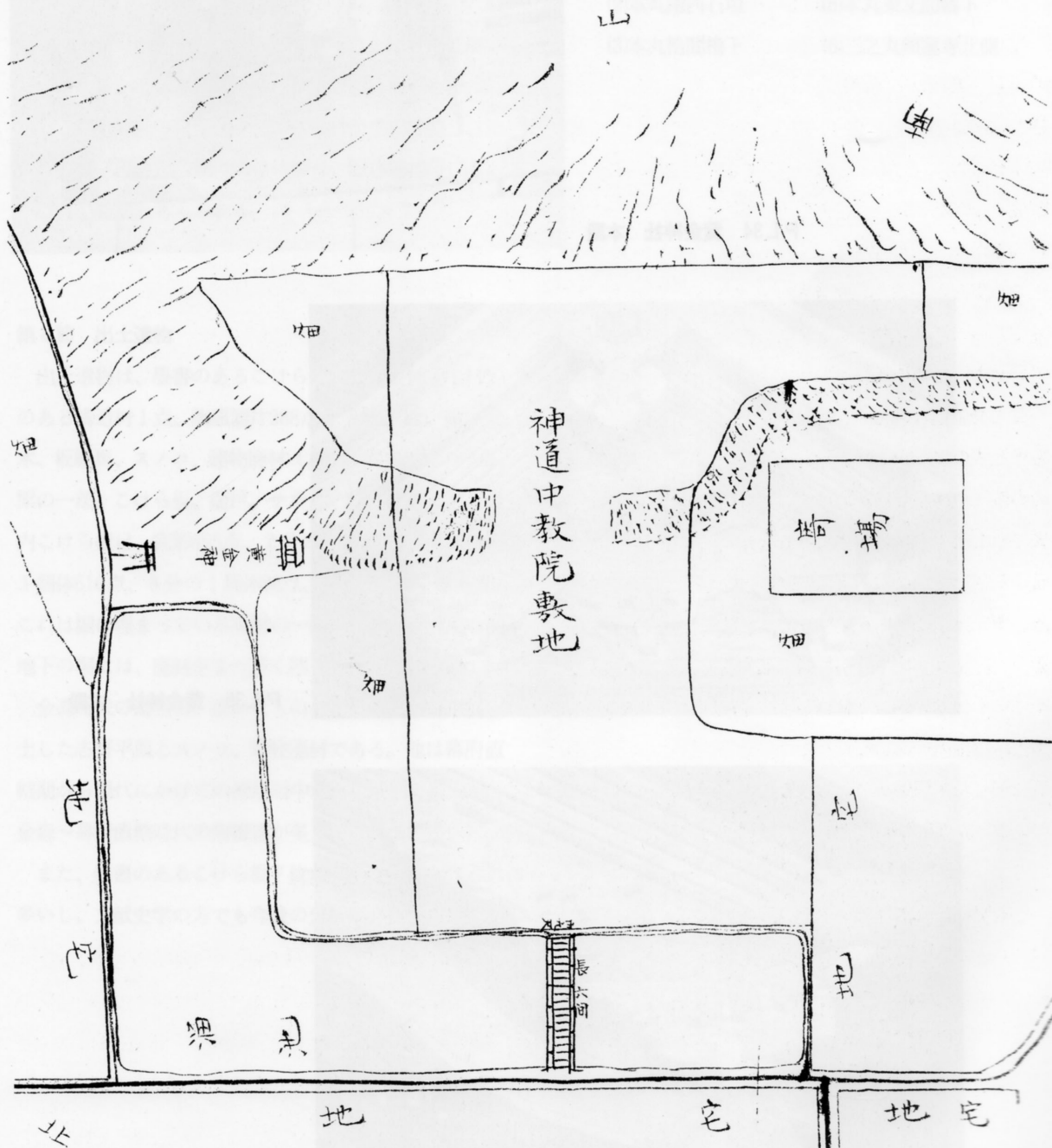
本社が東に向いていることは、知られていなかったことである。安政年間～明治初年には銀絞吹所の守護神となっていたことがある。

明治になってからは、明治5年拝殿修理のため、社内杉の木三本と、水無神社の古神楽殿をゆずり受けて建替えたとある（里正日記）。明治12年、神宮教中教院大講堂が創建された（忠孝苑大神宮）のを機会に翌3年2月、大講堂の東側に社殿を移築した。この時、覆殿、拝殿は取り壊されたが、本社はそのまま移転した。

以上、流れをまとめると、①慶長年間、鉱業開発祈念

のため勧請された＝黄金神社、金山一、②直轄地時代は平左衛門の霊を慰める＝宮島霊神、③文政3年「金の神」として堀の上へ移築＝金之神、④安政年間～明治初年銀絞吹所の守護神＝黄金神社、⑤明治13年、中教院創建により現在地へ移築＝黄金神社

現在の黄金神社（P L34～36）は、ケヤキ造りの、非常に出来の良い社殿で、覆屋の中で大事にされてきた建物である。建築年代は専門家の判断を待ちたいが、文政以前の可能性もある。高山城内に残る数少ない確かな建築物であり、重要である。



第21図 東向きになっている黄金神



PL33 黄金神社 外観



PL34 黄金神社 本殿



PL35 黄金神社 本殿



PL36 黄金神社 本殿

### 第3節 三之丸の堀

元禄時代、金森末期の絵図でみると南北堀の南側が埋まっている状況がわかる(9頁・第7図)。文化5年には東西堀の西側が畑になっている状況がみえる(9頁・第9図)が、それらを裏付けるような堀の埋土が部分的に確認された。

堀の現況規模は東西長54m、幅11~12m、南北長58m、幅10~15mを測り、深さは道路面から5mの深さである。堀の形態は箱堀であるが、外側に向かって緩く傾斜している。D-D'地点で計測した堀底の標高は578.35mである。

堀の埋土は西端、南端を除いて上半分の層が攪乱層で下半分の層が金森後期頃からの粘土堆積層と考えられる。西端、南端の堀の埋土は上層部に木材が多く堆積し、その内南端の木材包含層の堆積時期は、城郭破却時ごろからの古い時期と考えられる。

### 第4節 出土遺物

出土遺物は、墨書のあるこけら板9枚、番付(九十四)のある構造材1点、陶磁器片288点、下駄、椀、鍬、版木、板絵馬、スノコ、建物廃材(六葉、隅木、柱の一部、梁の一部、こけら板、面戸、サルコ)などである。その内こけら板は、完形658点、2分の1個体661点、4分の1個体610点、8分の1個体86点、細片834点であるが、これは堀に埋まっている廃材の一部である。寺境宅の敷地下の堀には、廃材がまだ多く埋まっていると思われる。

金森時代の遺物は、確かなものとして堀底近くから出土した志野平皿とスノコ、建物廃材である。他は幕府直轄期から現代にかけての攪乱層中からの遺物であるが、金森~幕府直轄時代の陶磁器が多く含まれている。

また、墨書のあるこけら板7枚から判断できたことは多いし、文献史学の方でも今後の分析が必要である。

### 第5節 遺存する石垣実測図

平成7年度は、堀の発掘調査と同時に、現存する石垣の測量調査も行なった。測量は委託し、平成8年度以降における石垣保存整備の基本図となるようにしたものであり、巻末図面袋に20枚の図面を添付している。

本丸周辺は土砂流出が進み、残るわずかな礎石も転石となる恐れがあり、また石垣中の樹木の成長で石垣崩壊が予想される箇所もある。

遺存する石垣の測量箇所は次のとおりである。

- |           |             |
|-----------|-------------|
| (1)本丸台所下  | (4)本丸太鼓櫓下   |
| (2)本丸南西石垣 | (5)本丸東北曲輪下  |
| (3)本丸拾間櫓下 | (6)三之丸照蓮寺北側 |

高山城関係資料一覧表 (角竹郷土史料文庫)

2-2 城郭

(高山城絵図)			
1 旧高山城絵図 (飛騨市庁所蔵図写) (角竹写)			
寛文3年4月	1枚		
2 城山字絵図	1枚		
3 高山城模擬天守閣設計図	1枚		
4 高山城下町絵図 (家中屋敷書入)	1枚		
5 天神山城絵図・高山城絵図 (飛州志のもの)	2枚		
6 高山城絵図 (写) (主図合結記中のもの)	1枚		
7 高山城絵図 (角竹写)	1枚		
8 高山城絵図	1枚		
9 高山城二之丸図	1枚		
10 高山城本丸図	1枚		
11 高山城全図	1枚		
12 飛州大野郡高山城絵図 (清見村牧ヶ洞了徳寺蔵写) (角竹写)	1枚		
13 高山城二之丸之内庭樹院殿屋敷絵図面	1枚		
14 高山城絵図 (延宝4年3月14日金森左京印判) (角竹写)	1枚		
15 高山城下町と家中屋敷絵図 (角竹写)	1枚		
16 高山町並絵図	1枚		
17 高山城下図	1枚		
18 高山城下図 (大野郡清見村了徳寺蔵写)	1枚		
19 金森左京邸附近絵図 (角竹写)	1枚		
20 飛州大野郡高山城絵図写真板	1枚		
21 高山城下図 (印刷)	1枚		
22 高山城下図	1枚		
23 高山町並絵図 (町の長さ書き入れあり) (天領時代)	1枚		
24 高山城本丸地域礎石及端取石列図 昭和30年7月3日	1枚		
25 高山城跡・十三間屋倉・天守台礎石発見追加図 昭和30年7月21日	1枚		
137 高山城下絵図 (角竹写) (元禄年間)	1枚		
138 高山城下割地絵図 (元禄10年頃)	1枚		
139 高山町並并ニ社寺絵図面 (天明4年焼失以前) 寺島善平写 明治10年6月6日			1枚
(写真、拓本、揭示説明資料)			
26 高山城下町絵図写真			6枚
27 高山城図写真 (高山市役所蔵)			2枚
28 高山城絵図写真			3枚
29 飛州高山金森家古城絵図写真 (大八賀村岩井滝平氏蔵)			2枚
30 高山城跡及び公園内写真、フィルム			42枚
31 城山礎石拓本			2枚
32 高山城址碑文拓本			1枚
33 高山城郭の構え (揭示説明) (角竹作製)			1枚
34 高山城下図 (揭示説明用) (角竹作製)			1枚
35 高山城破却金沢藩 (揭示説明用) (角竹作製)			1枚
(その他史料)			
36 高山城の古図を発見〔新聞切抜〕 昭和14年			2枚
37 飛騨国高山城図について (写) (前田侯爵家尊経閣蔵書) 嘉永6年8月			1綴
38 高山城図に関する史料 (角竹写)			1綴
39 高山城址調査 角竹喜登調 昭和5、6年			1綴
40 高山城の規模 角竹喜登調			1枚
41 郷土国史第5号 (高山城の物語、附金森氏) 吉城郡上広瀬小学校発行			2冊
42 高山城について (講話資料) 角竹喜登			1綴
43 高山城跡と公園の説明案 (講話資料) 角竹喜登			1綴
44 飛騨鑑一部 (写) (高山城関係)			1綴
45 書簡 (高山城址旗立石は搦手の高麗門礎石なりと観る)			1綴
46 高山城の城壁発見 (保寿寺境内畑地にて)〔新聞切抜〕 昭和13年			1枚
47 高山城調査記録 (角竹記録)			1綴
48 随想録高山城趾 梅村左吉			1枚
49 高山城の規模調査案 角竹喜登調 昭和5年8月			1綴



50	高山城跡本丸地域礎石発見報告書 岩畑修 昭和30年7月	1綴
51	飛驒在番記(一部)	1綴
52	加賀藩飛驒史料一(写)	1冊
53	加賀藩飛驒史料二(写)	1冊
54	加賀藩飛驒史料三(写)	1冊
55	加賀藩飛驒史料四(写)	1冊
56	城山公園の沿革 角竹喜登	2枚
57	古城跡公園文書(写)(古城跡公園設置願他) 明治7、8年	1綴
58	高山市の発祥と三城下町	1綴
59	高山の公園(高山城跡/紙魚のやとり他より) 〈角竹写〉	1綴
60	飛州志第六巻 古城部目録(写)	1冊
61	松平宰相様御家中飛州高山御城御在番覚 元禄5年10月	1綴

※『角竹郷土史料文庫目録』 2. 城郭の項目(11~13頁)より数字番号は資料の請求番号である。

フリガナ	タカヤマジョウアトハックツチョウサホウコクシヨ
書名	高山城跡発掘調査報告書Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	高山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第23号
編著者名	田中 彰
編集機関	高山市教育委員会 文化課
所在地	〒506 岐阜県高山市上一之町75 高山市郷土館内 TEL <0577> 32-1205
発行年月日	西暦1996年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タカヤマジョウアト 高山城跡	タカヤマシ 高山市 シロヤマ 城山 シンメイチョウ 神明町 ほか	21203	G12T 00598	36度	137度	19950801	600	公園整備
				8分 6秒	15分 59秒	19951130		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
高山城跡	平山城 (中世) (近世)	近世	三之丸堀 建物廃材包含層	金森時代の建物 廃材 陶磁器	墨書のあるこけ ら板9枚 志野、御深井、 信楽、肥前、瀬 戸、美濃
		近世	石垣測量 本丸、三之丸		野面積

---

## 高山城跡発掘調査報告書 Ⅲ

平成8年(1996)3月 発行

編集／高山市教育委員会

発行／高山市教育委員会

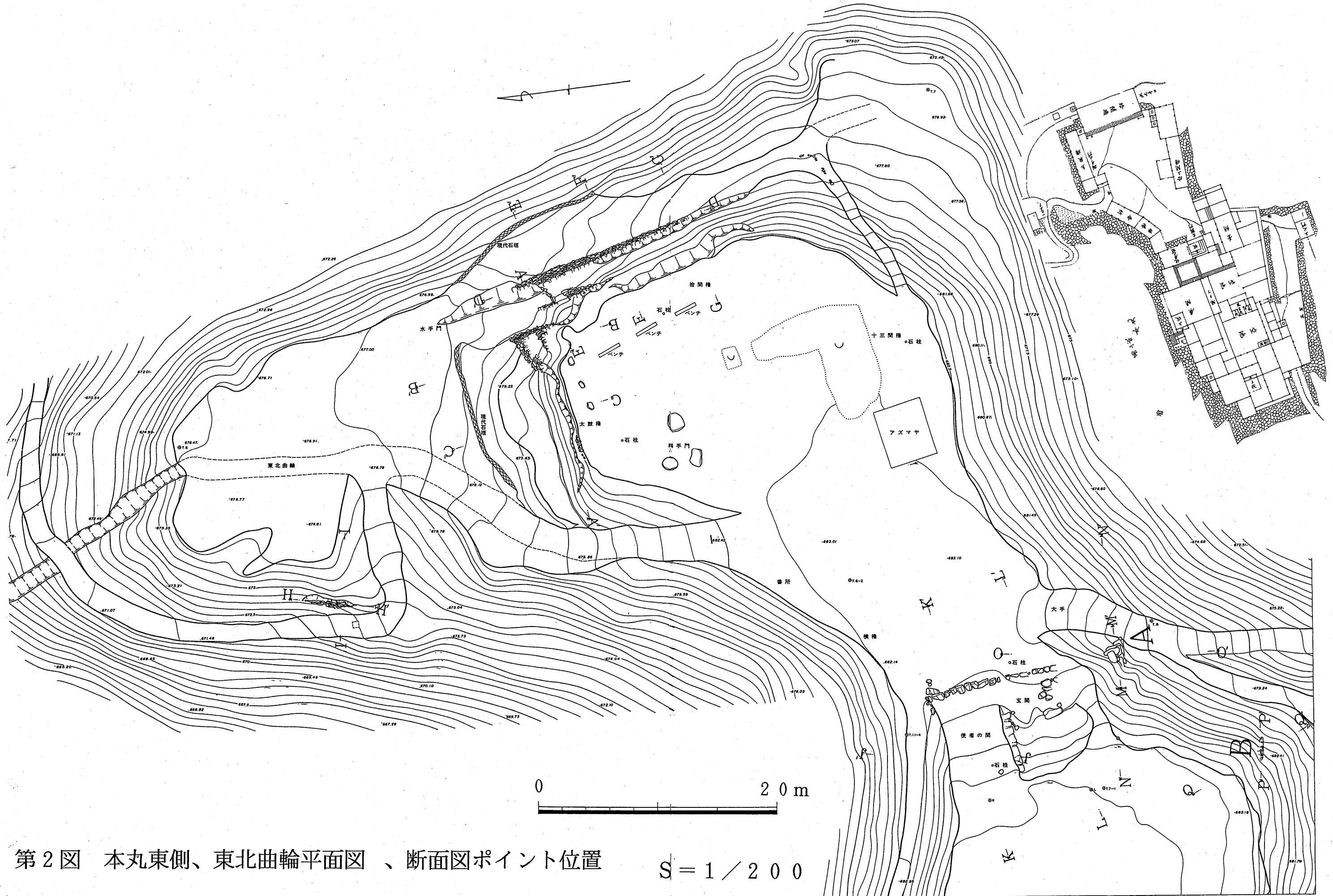
印刷／斐太中央印刷株式会社  
高山市下三之町14番地

---



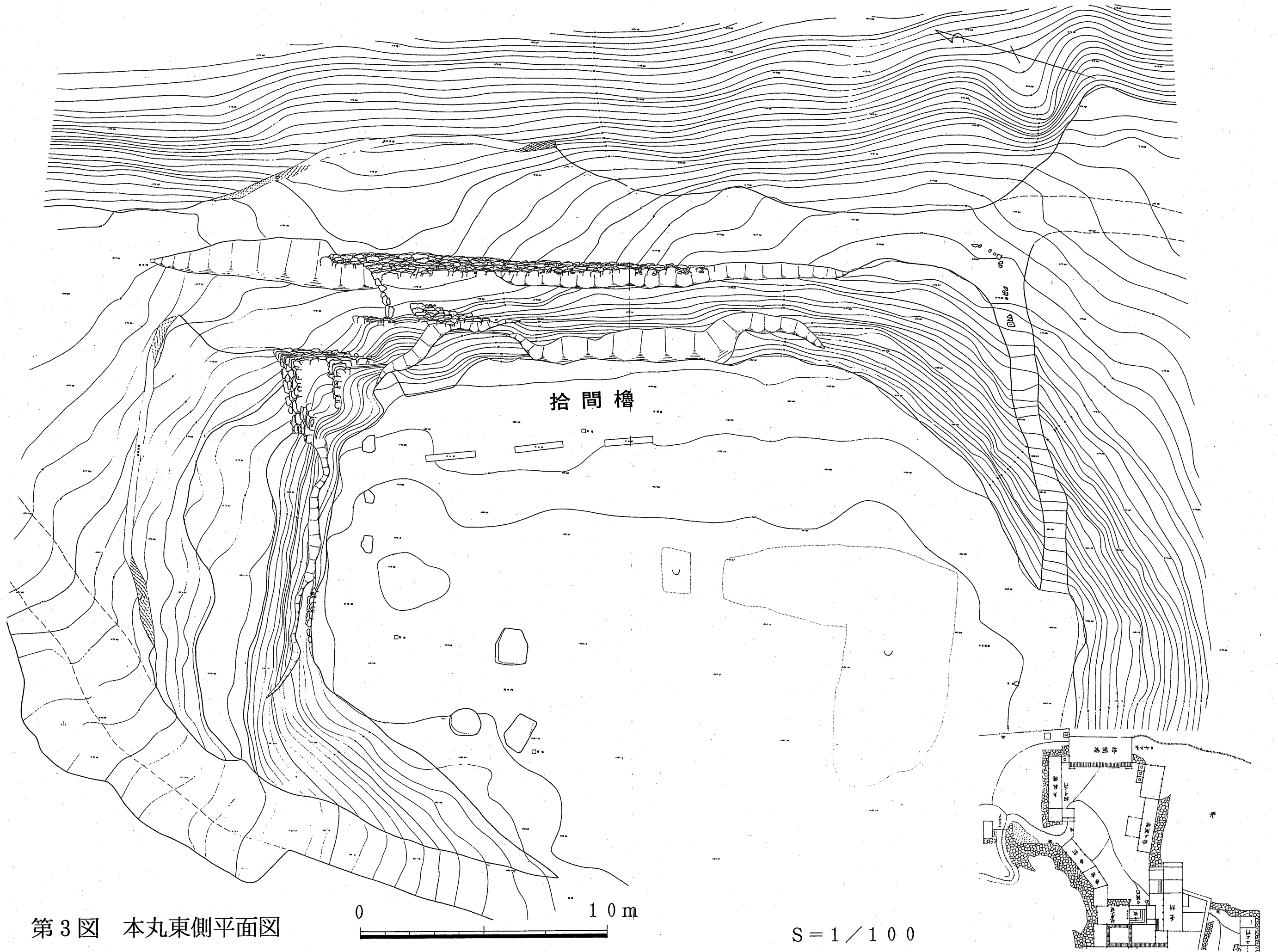
第1図 高山城本丸周辺全体平面図

S = 1 / 400



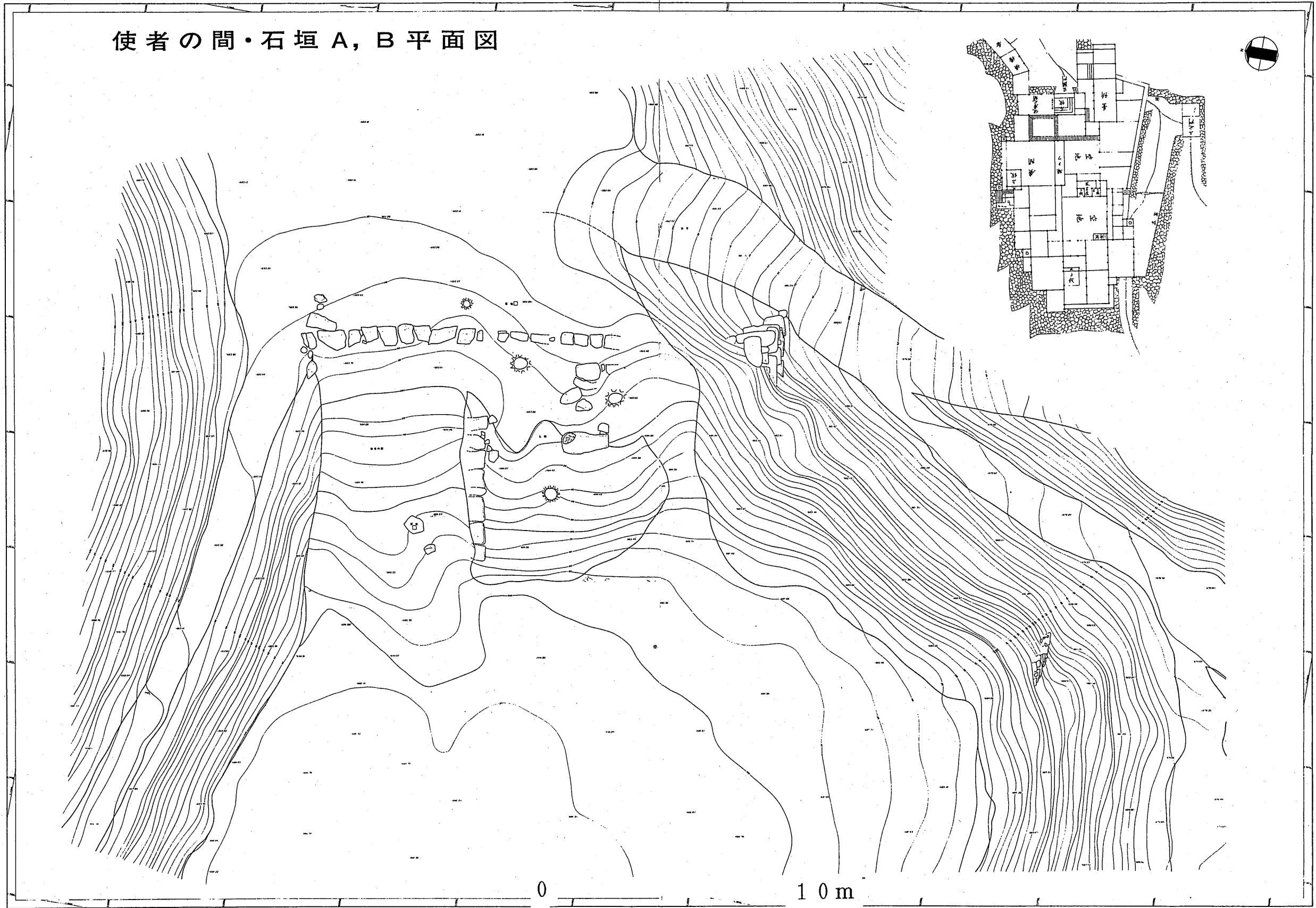
第2図 本丸東側、東北曲輪平面図、断面図ポイント位置

S = 1 / 200



第3図 本丸東側平面図

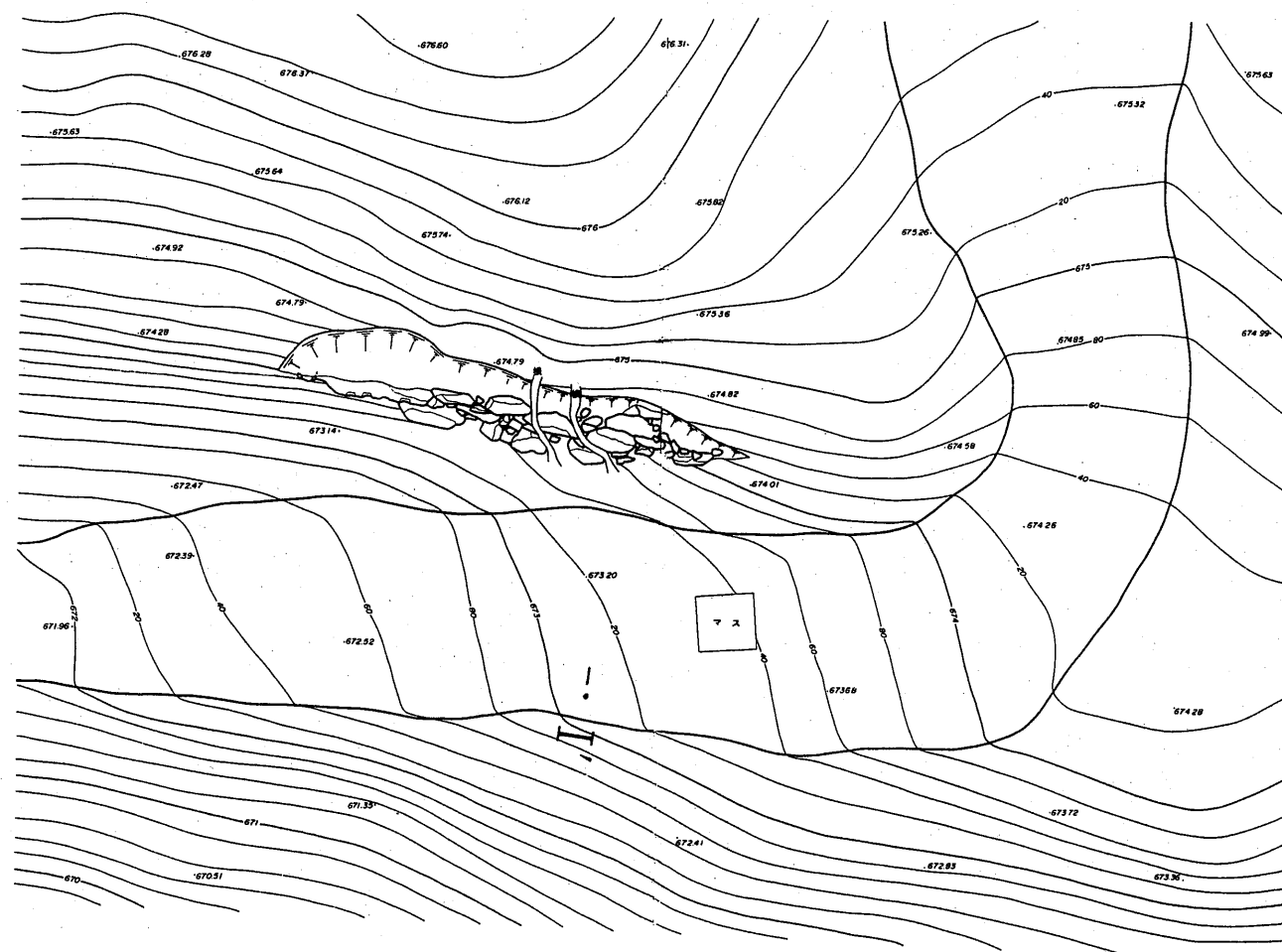
使用者の間・石垣 A, B 平面図



第4図 本丸 使用者の間平面図

S=1/100

東北曲輪平面図 s=1:50



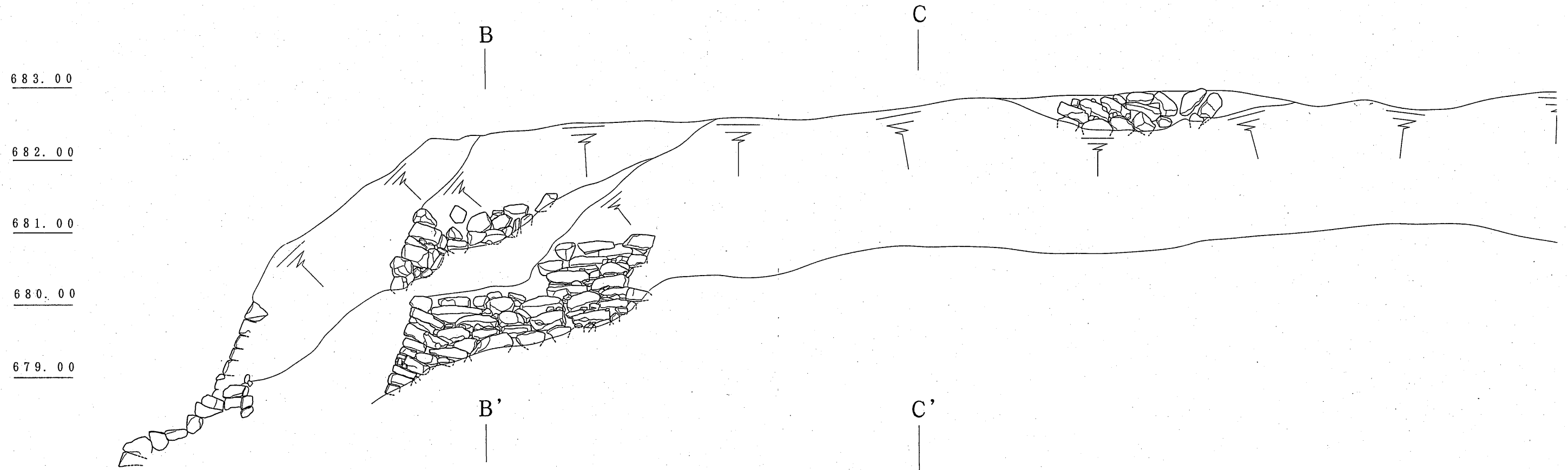
第5図 東北曲輪西側石垣平面図



A —

拾間櫓

— A'

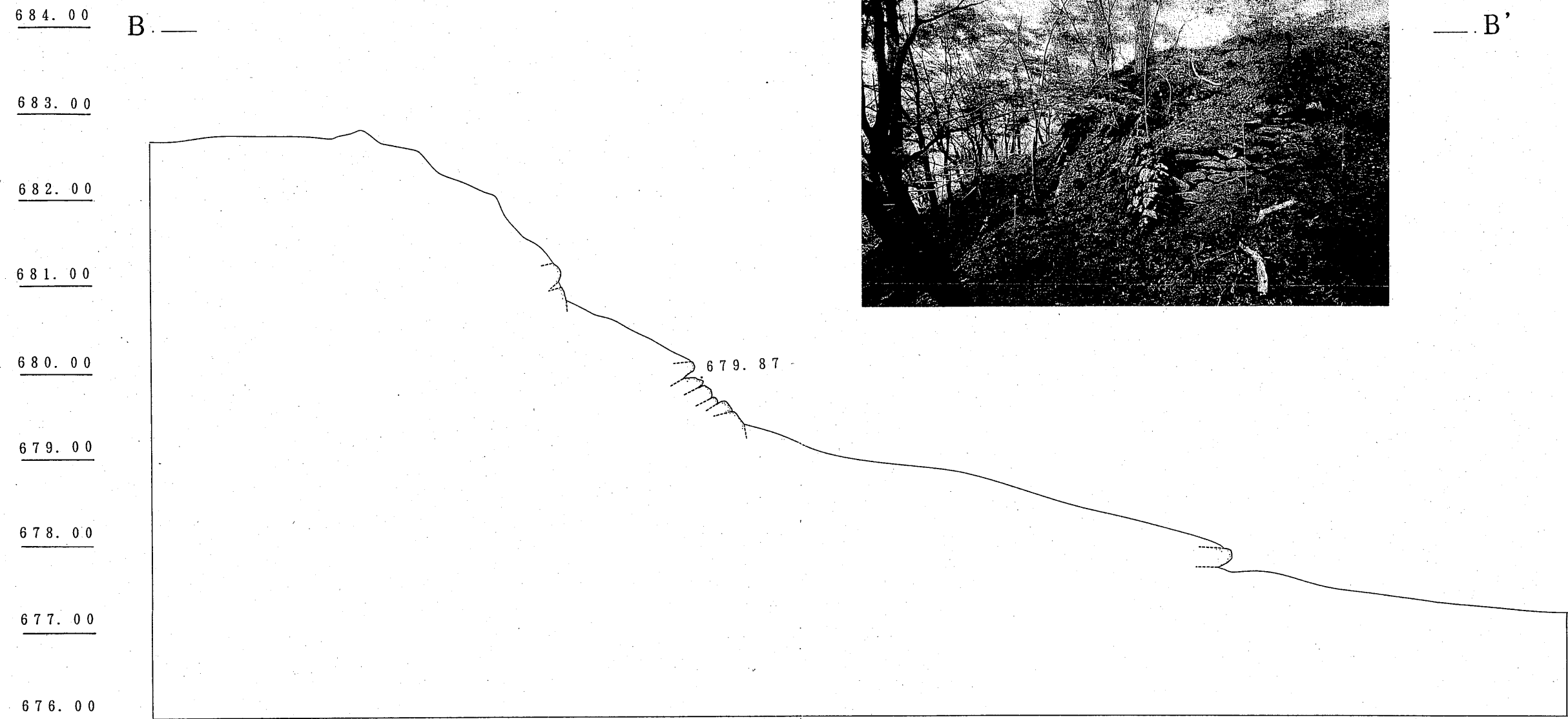


第6図 本丸太鼓櫓立面図A-A'



S = 1 / 40

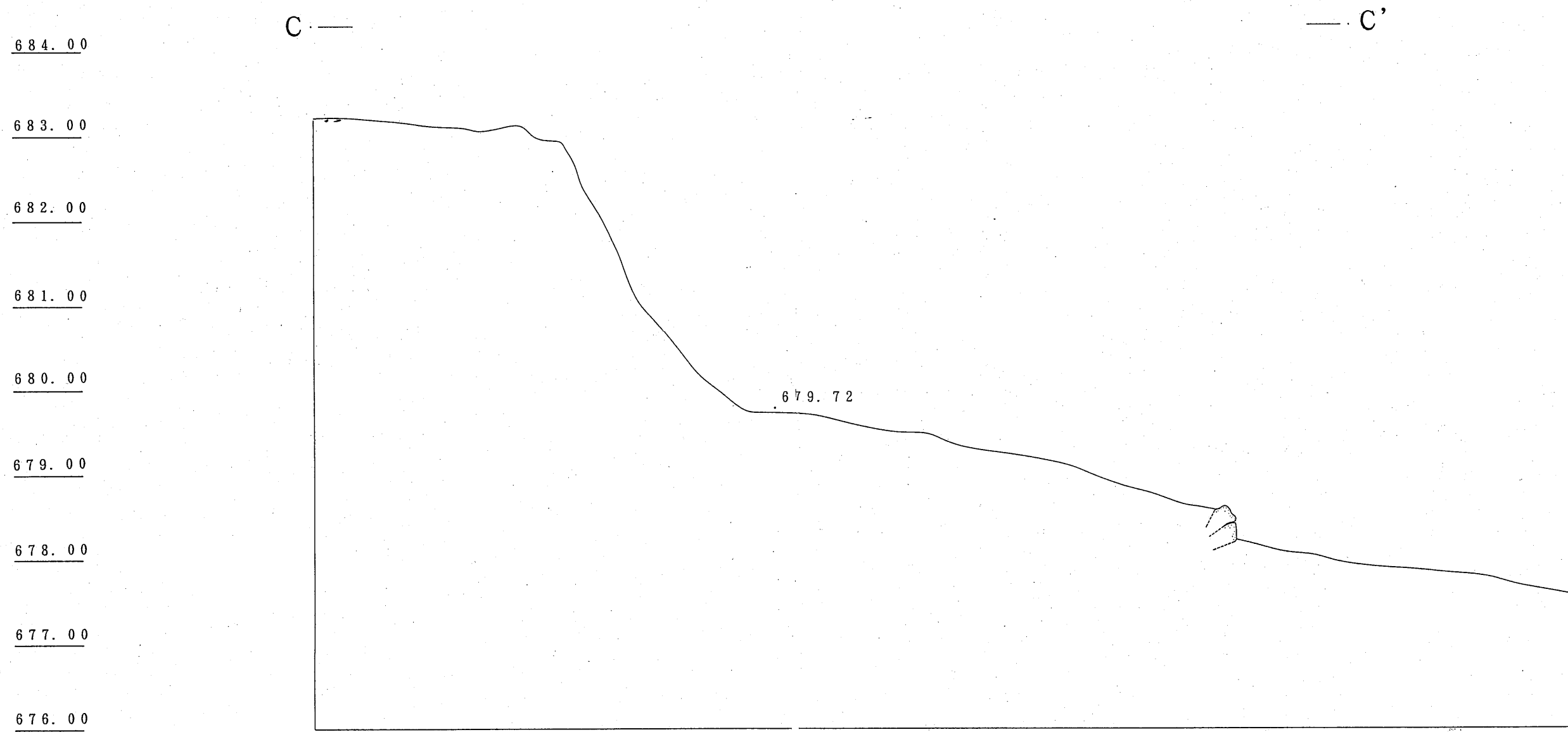
拾間櫓 S=1/40



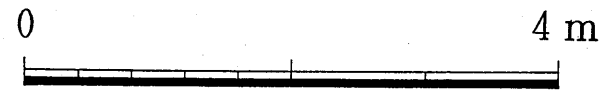
第7図 太鼓櫓断面図B-B'



拾間櫓

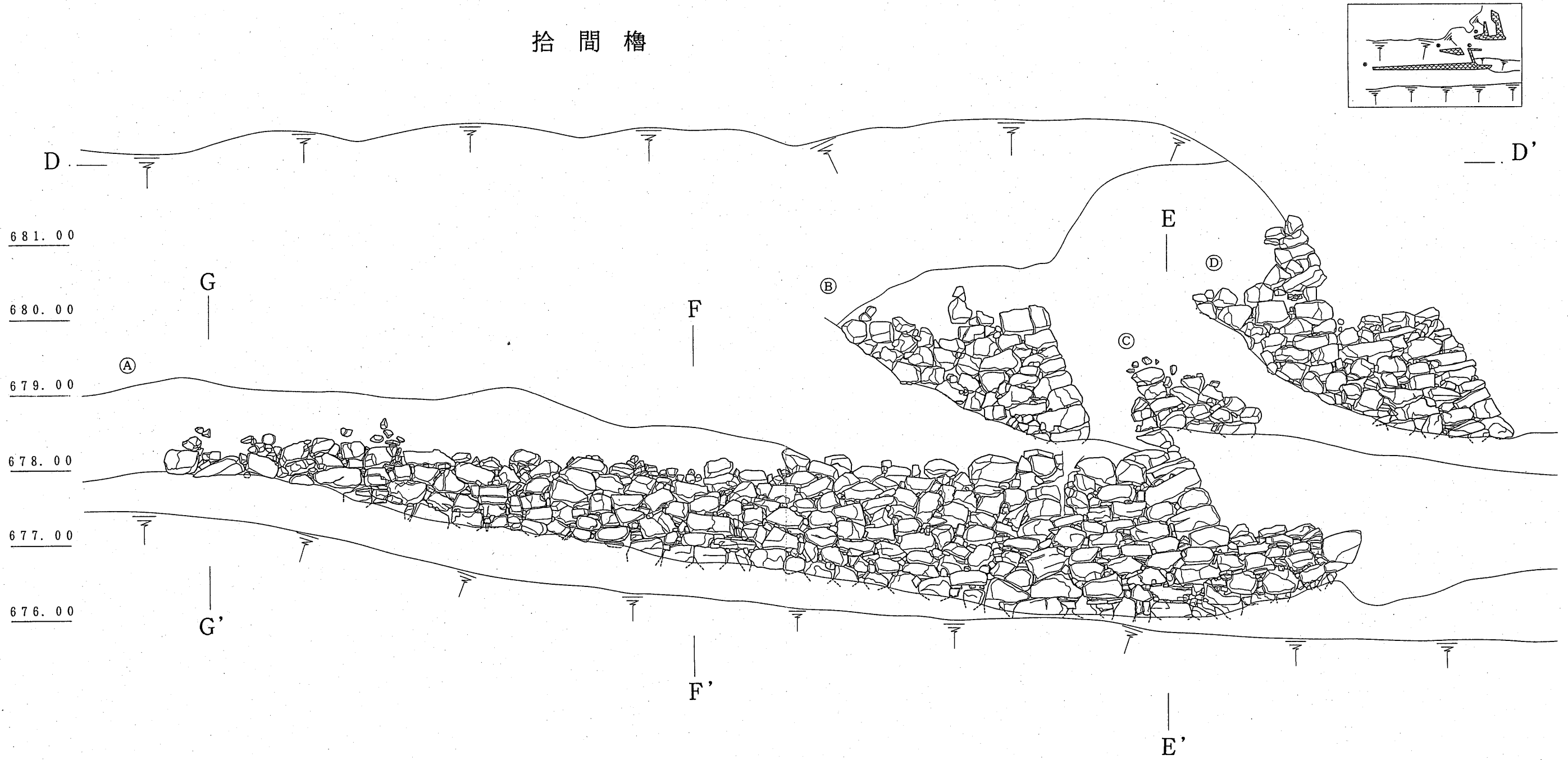


第8図 太鼓櫓断面図C-C'



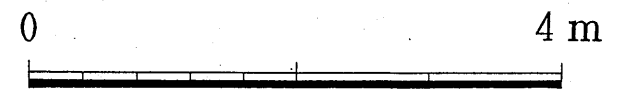
S = 1 / 40

拾間櫓

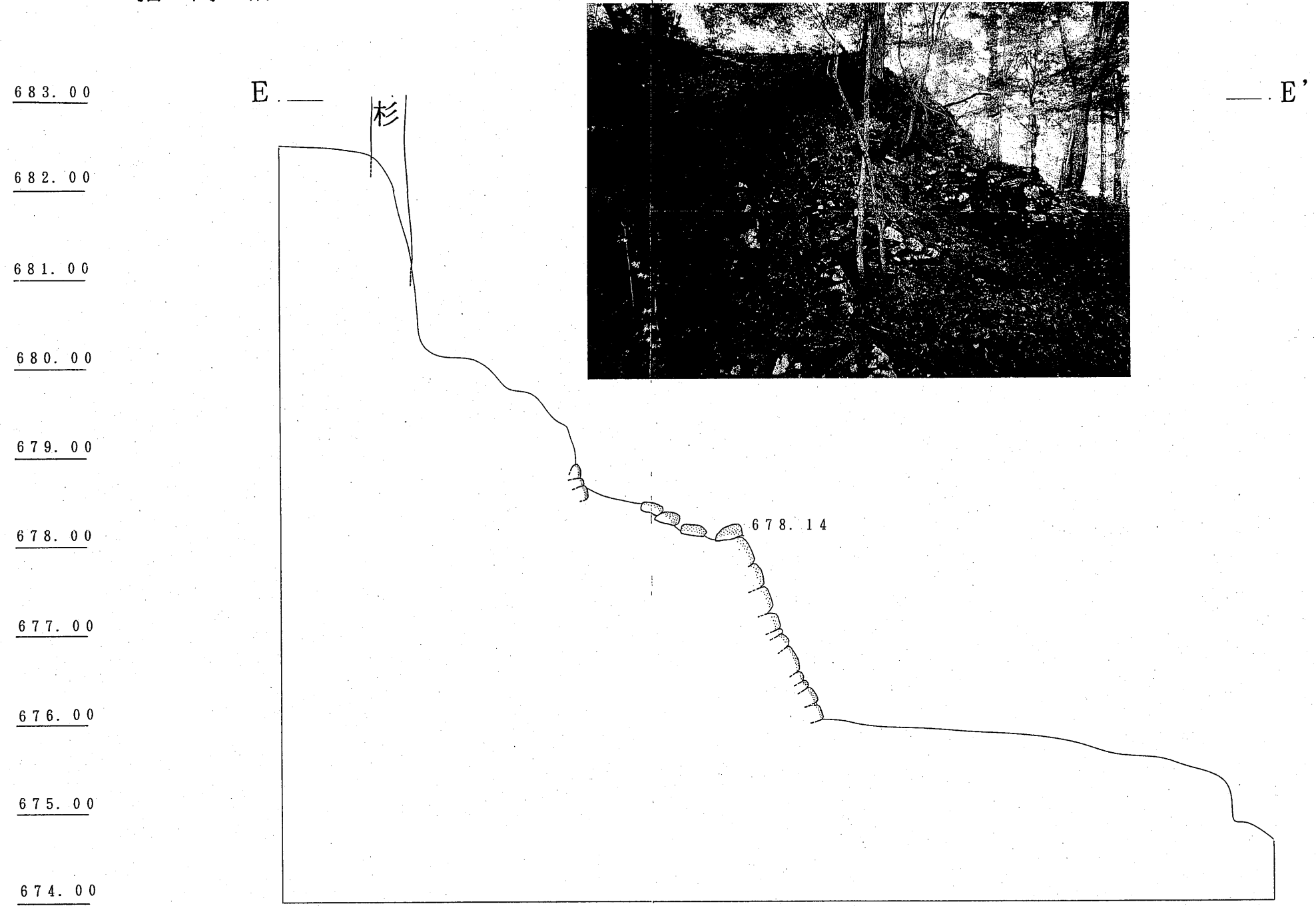


第9図 本丸拾間櫓立面図D-D'

S = 1 / 40



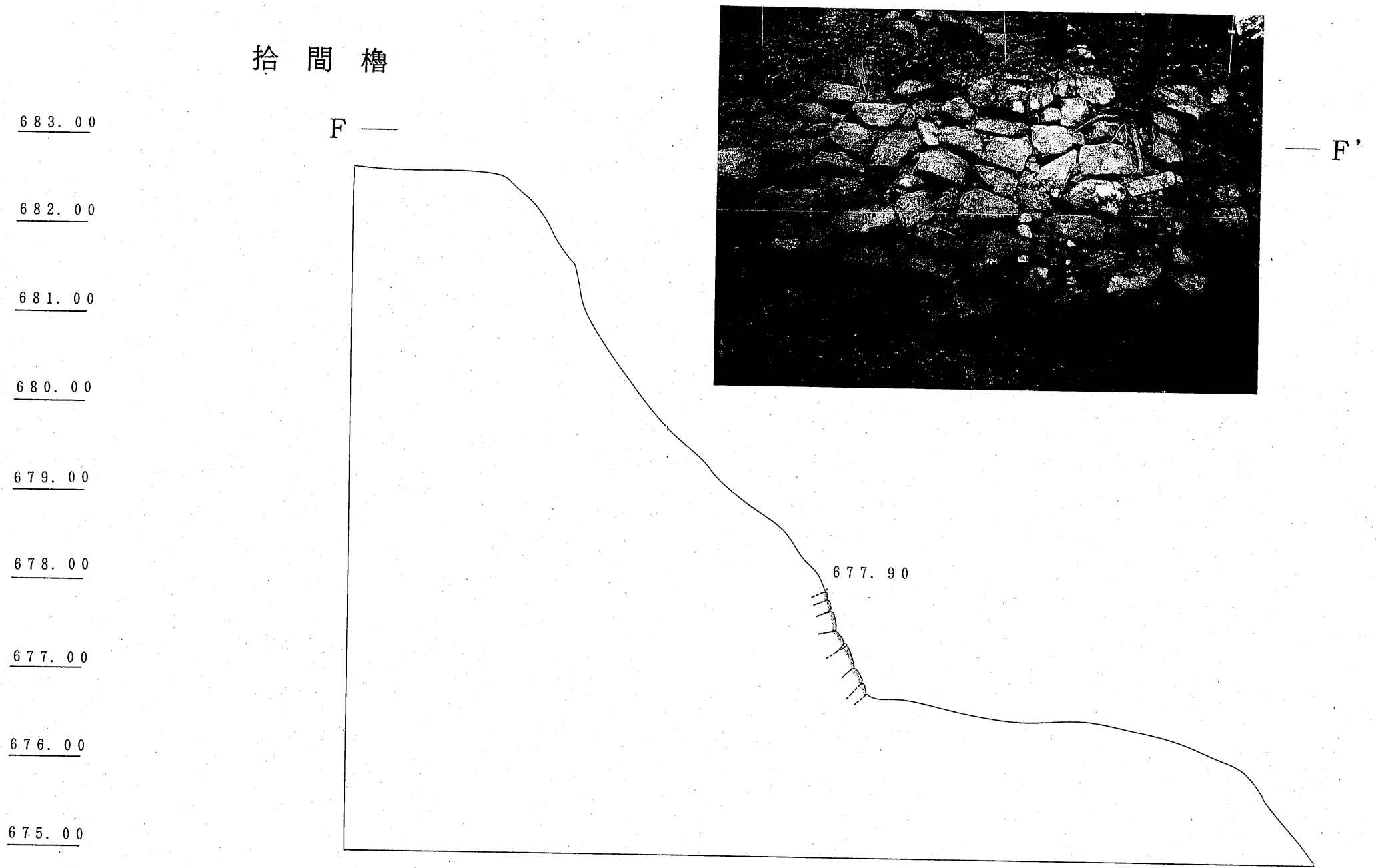
拾間櫓



第10図 拾間櫓断面図E-E'



S = 1 / 40

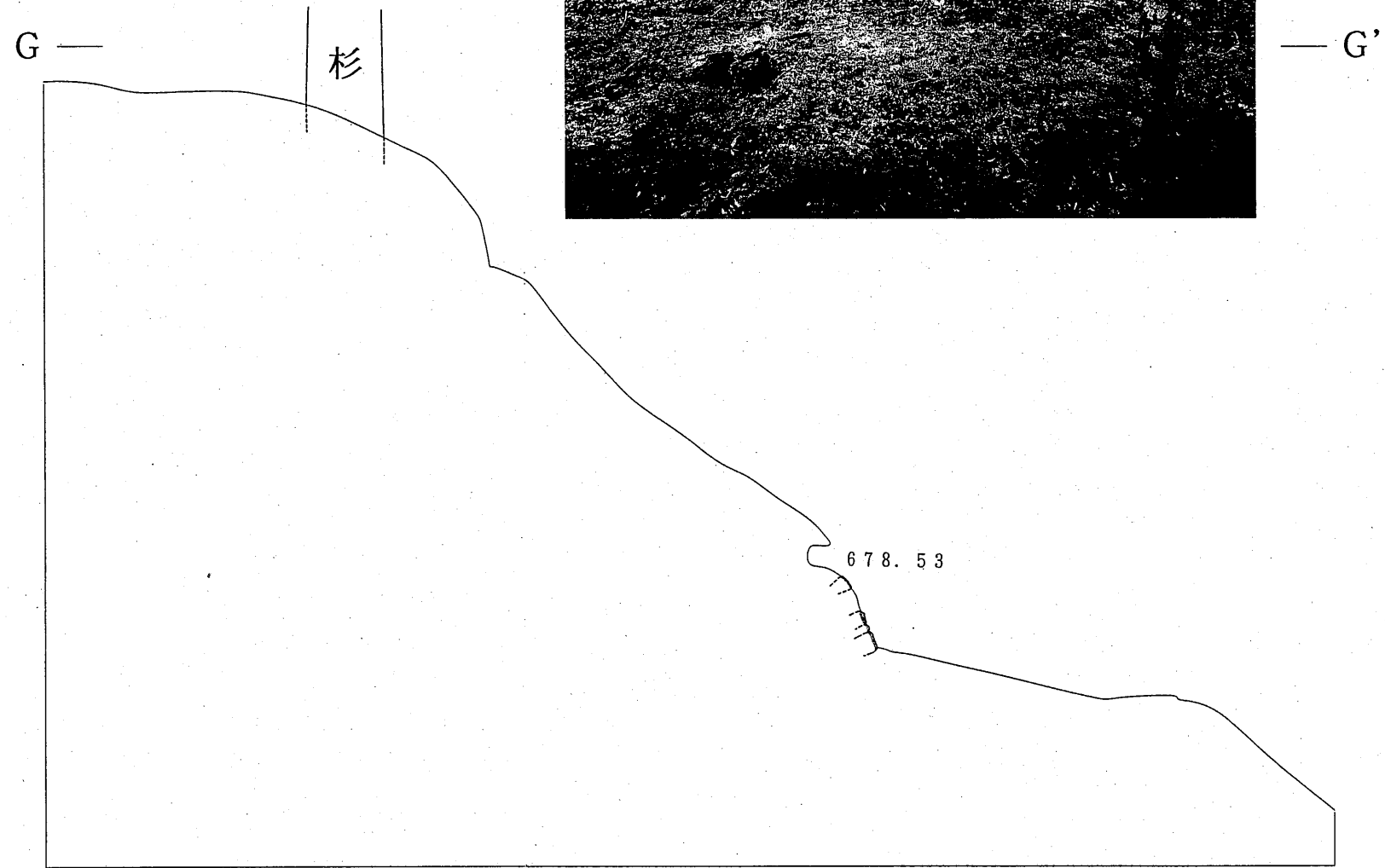


第 1 1 図 拾間櫓断面図 F - F'

S = 1 / 40

拾間櫓

684.00  
683.00  
682.00  
681.00  
680.00  
679.00  
678.00  
677.00  
676.00

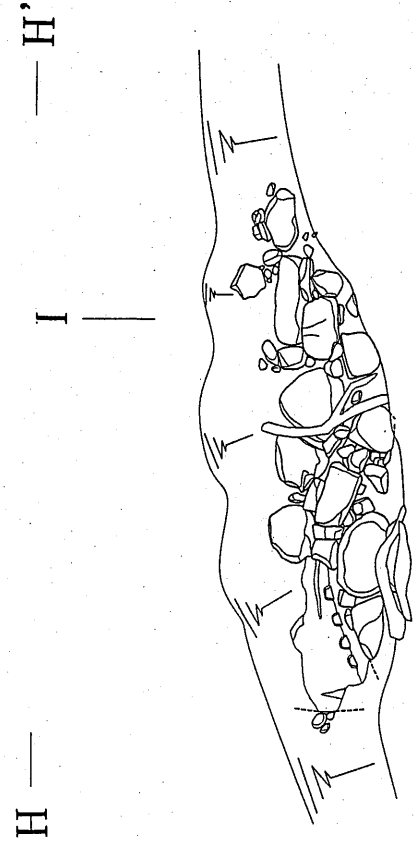


第12図 拾間櫓断面図G-G'



S = 1 / 40

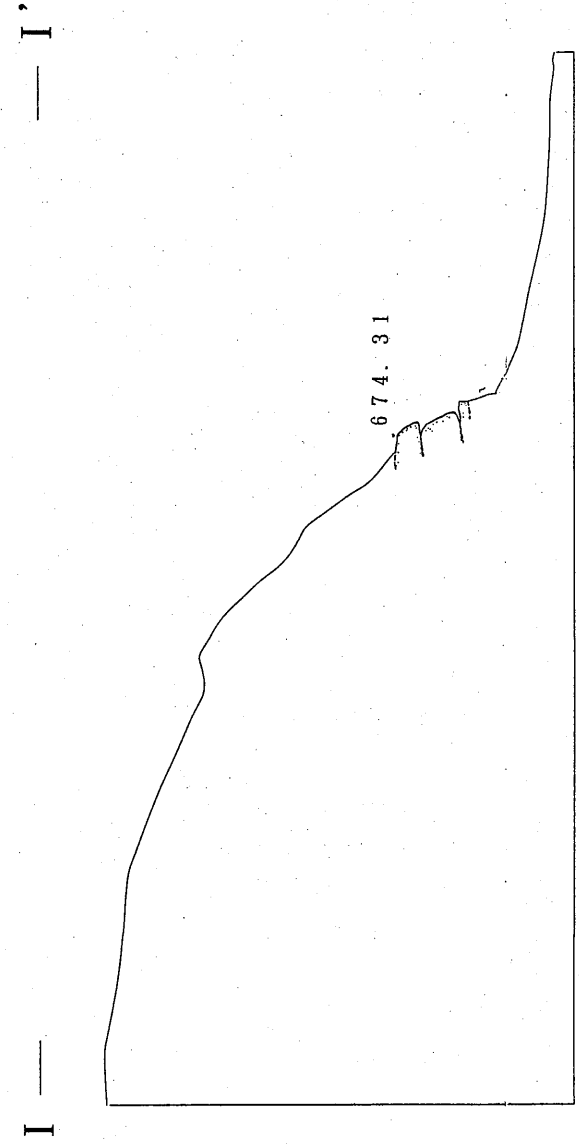
東北曲輪 S=1/40



675.00  
674.00  
673.00

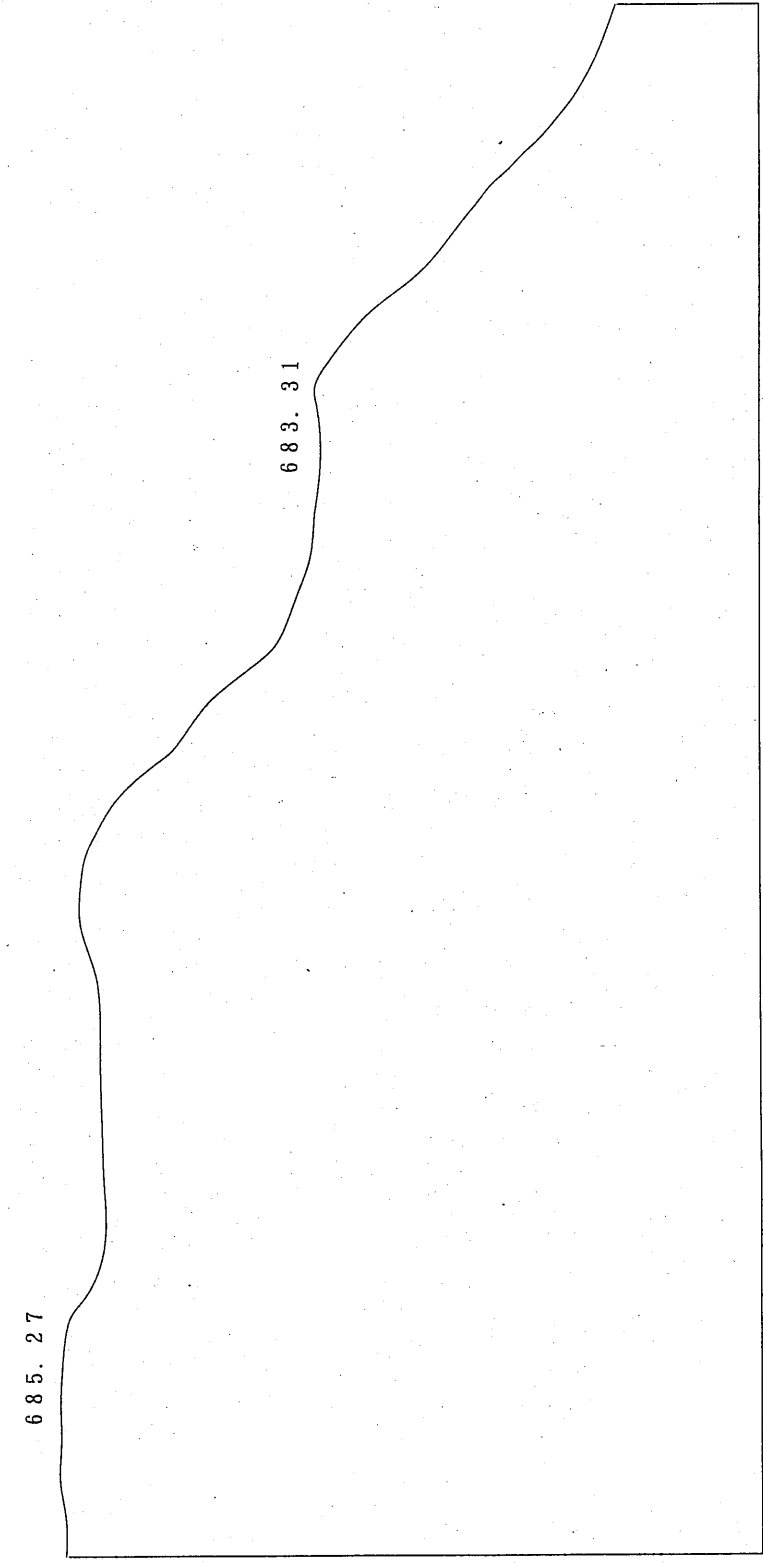


東北曲輪



678.00  
677.00  
676.00  
675.00  
674.00  
673.00

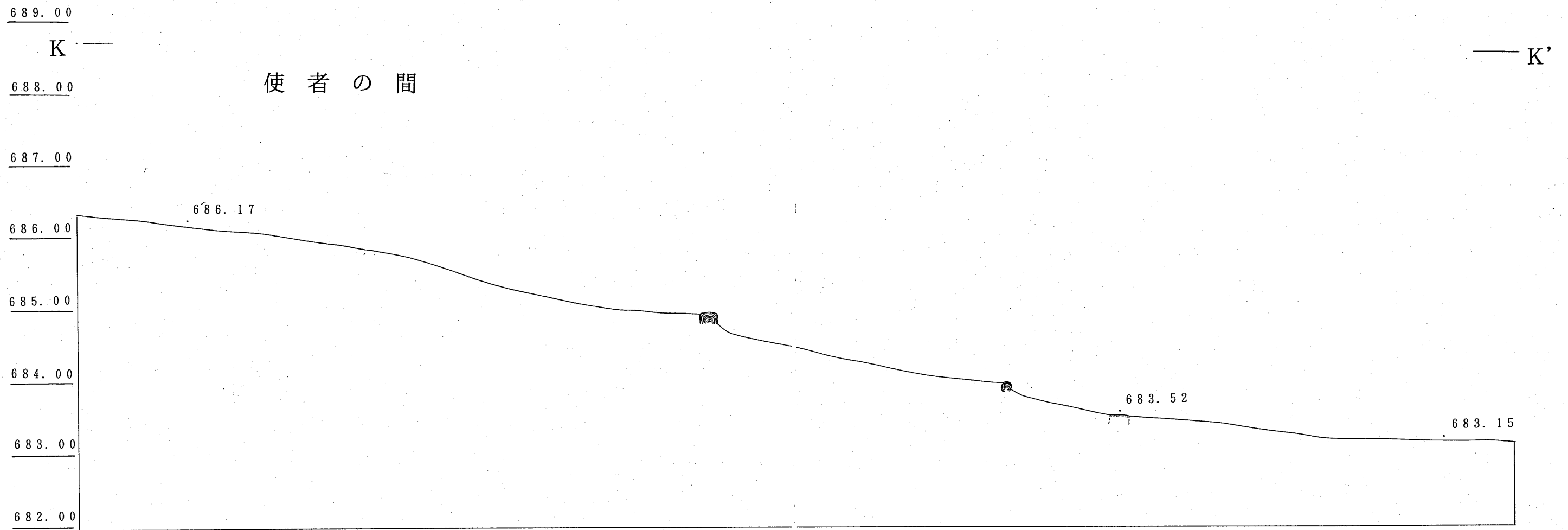
J— 使用者の間



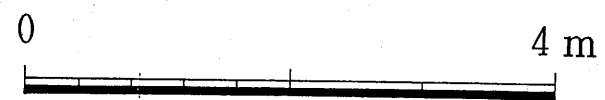
672.00  
687.00  
686.00  
685.00  
684.00  
683.00  
682.00  
681.00  
680.00

第13図 東北曲輪西側平面図、断面図 H-H'、I-I'、J-J' S=1/40 使用者の間断面図

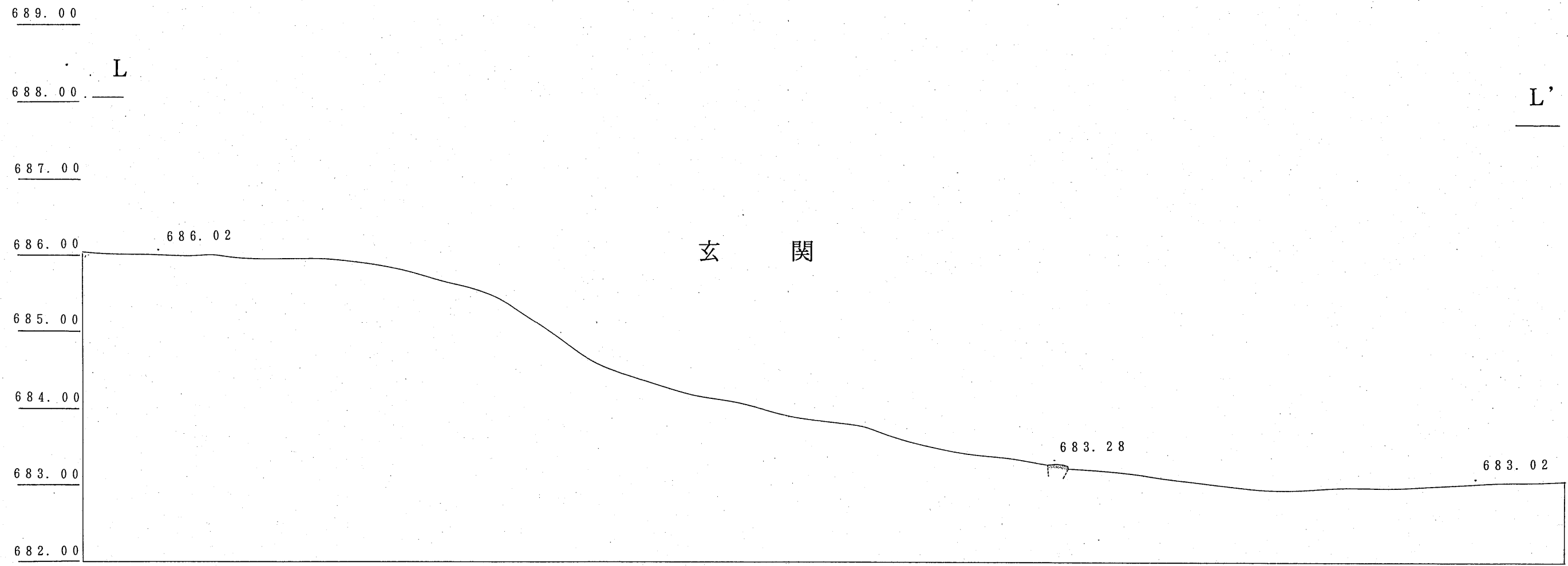




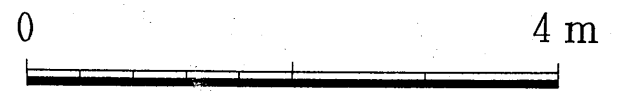
第14図 本丸使用者の間断面図K-K'



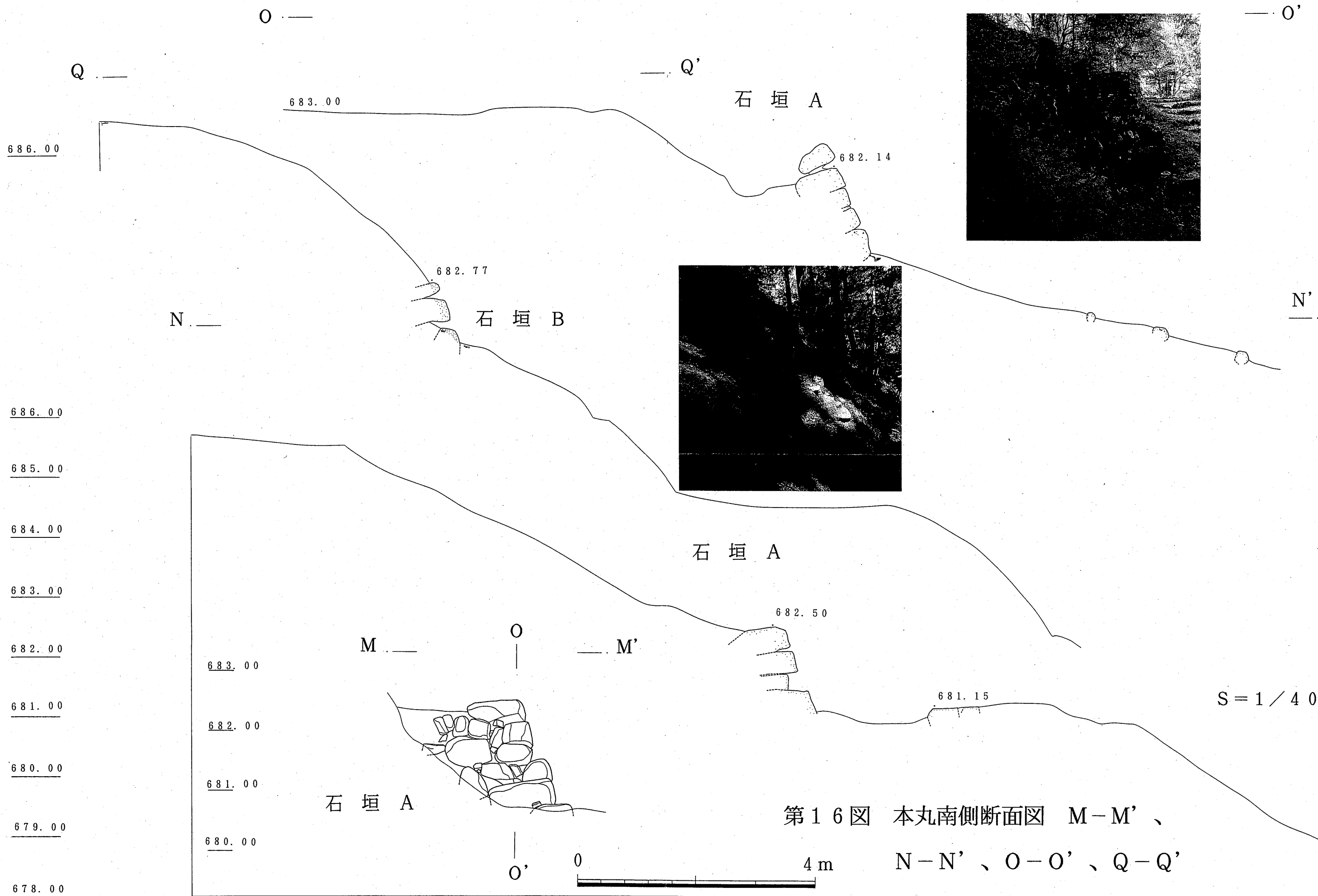
S = 1 / 40



第 1 5 図 本丸玄関断面図 L - L'



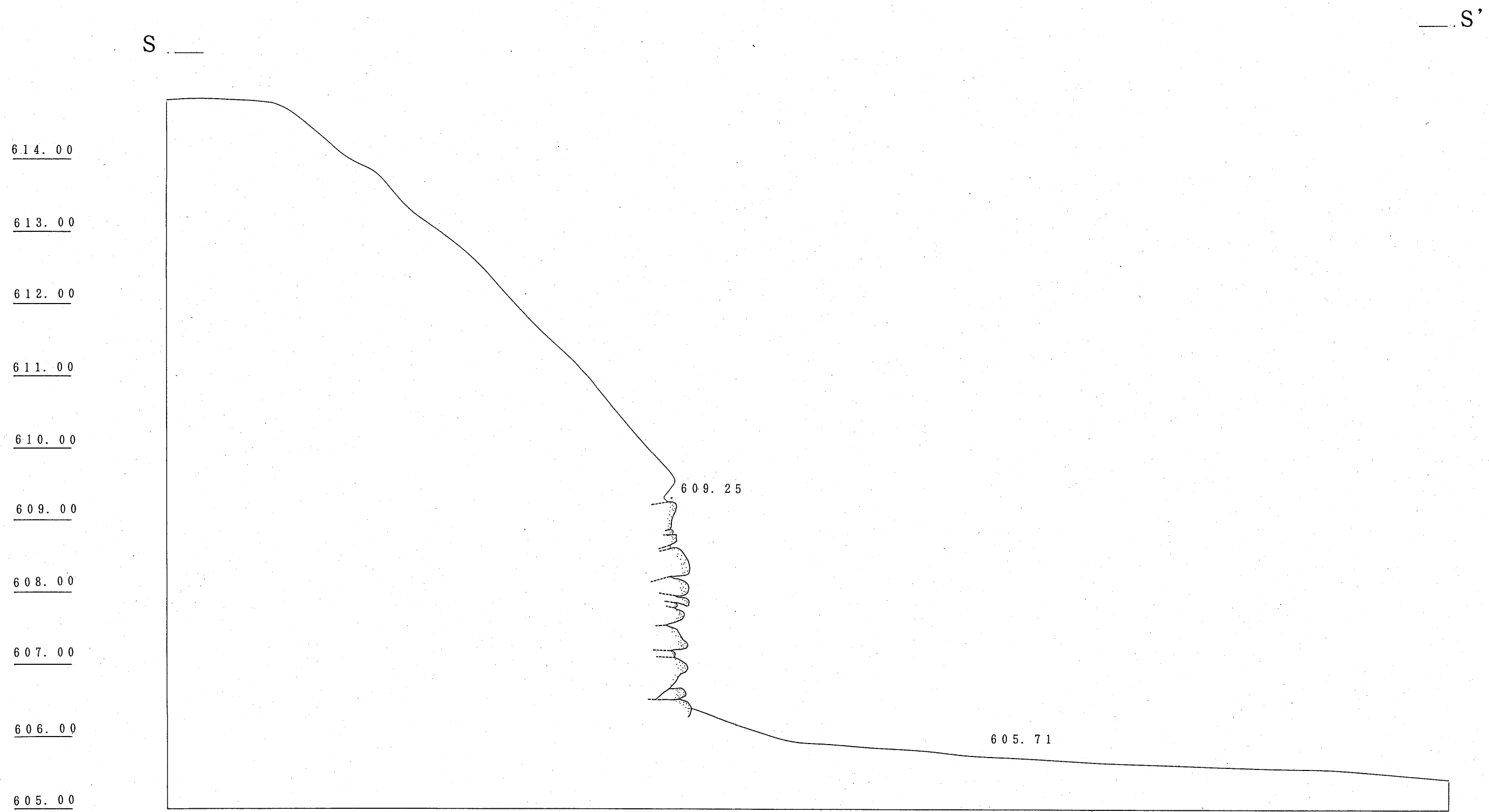
S = 1 / 40



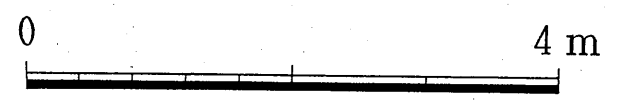
第 16 図 本丸南側断面図 M-M'、  
N-N'、O-O'、Q-Q'



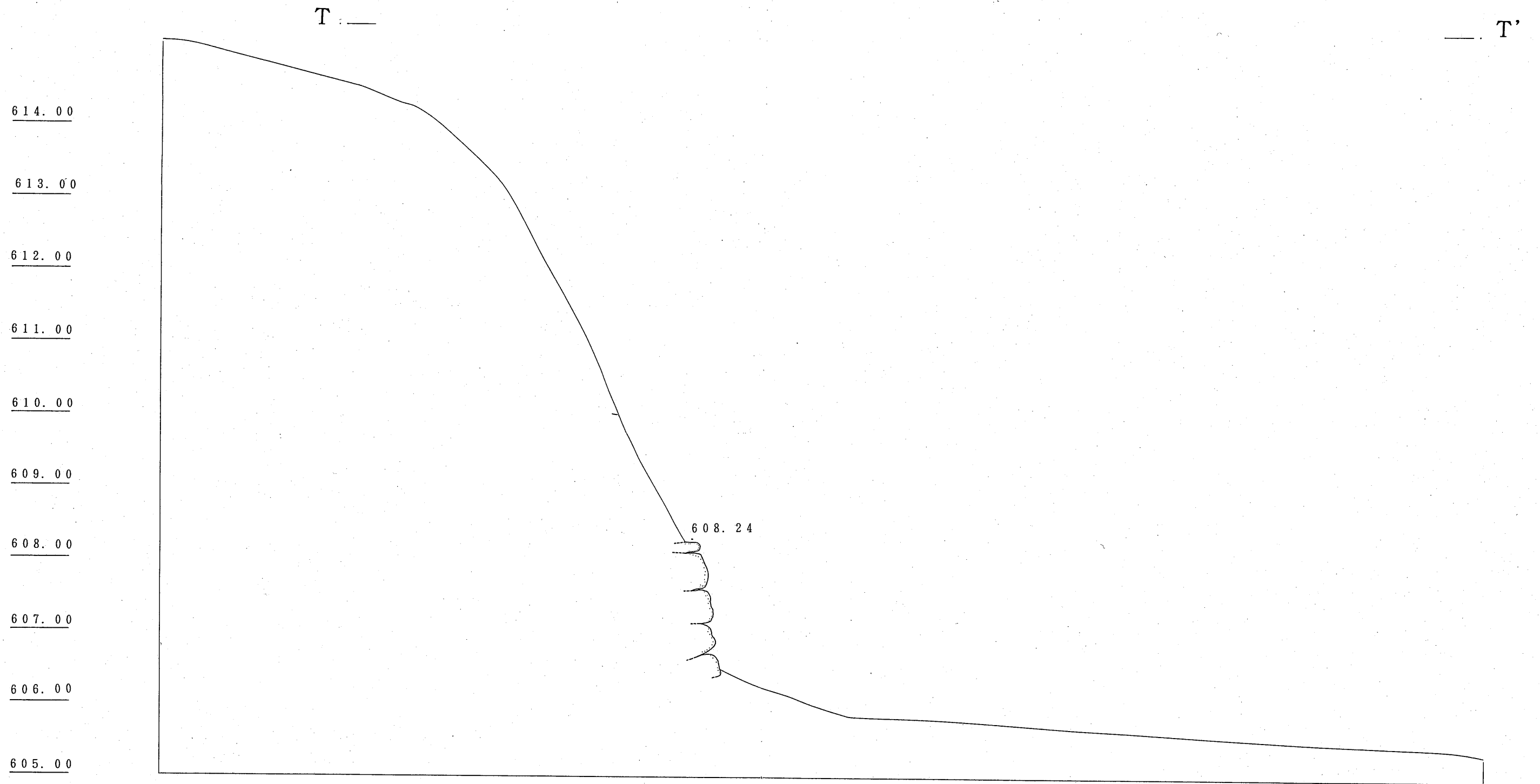
第17図 三之丸周辺平面図



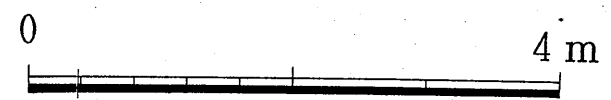
第 18 图 三之丸北側石垣断面图 S - S'



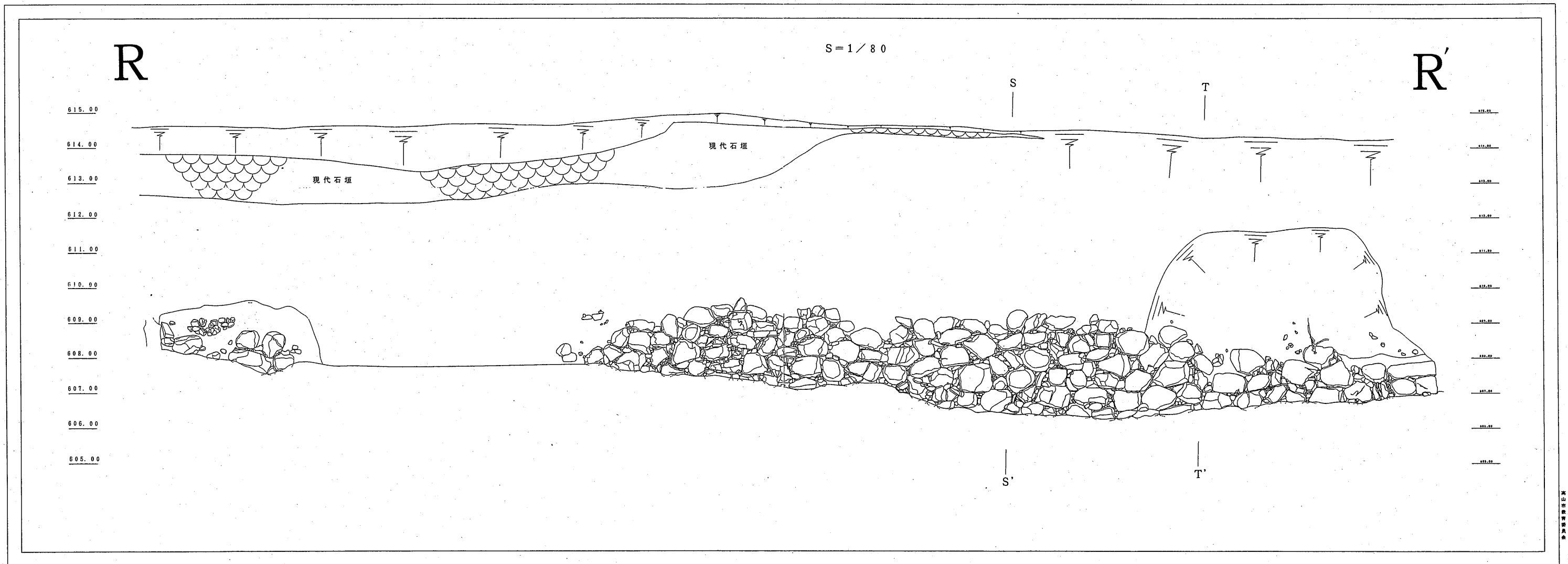
S = 1 / 40



第 19 图 三之丸北側石垣断面图 T - T'



S = 1 / 40



高山市教育委員会

第 20 図 三之丸北側石垣立面図

